
ほしにねがいを

みけぺん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほしにねがいを

【Nコード】

N5938I

【作者名】

みけぺん

【あらすじ】

中学一年生の夏休み、さくらはとある別荘へ家族旅行に出かける。そこで偶然出会った、一人の青年。剣崎一真と名乗った彼は、さくら達が別荘で滞在する数日間を共にすることとなった。普段は穏やかで明るく振る舞う剣崎だったが、さくらはその目に底知れない哀しみを感じ取り……。やがて剣崎自身も、さくらに少しずつ自分のことを語り始めていく。

CLAMP作品『カードキャプターさくら』と、平成ライダーシリーズ第5作『仮面ライダー^{フレイド}剣』の後日談を意識したクロスオーバー。

戦闘を含めたスリリングな展開よりも、あくまで穏やかな日常の一幕、そして「剣崎のその後」を主軸に描いていきます。突発的に書き始めた上に初投稿ですが、よろしければどうぞお付き合ってくださいませ。

序 PROLOGUE (前書き)

どうも初めまして、みけぺんと申します。

つい最近まで仮面ライダーシリーズ関連作品を中心に、いわゆる“ロム専”で通していましたが、この度思い切って作品を投稿させていただく次第となりました。

扱う原作は、CLAMP先生の傑作で私もお気に入り『カードキャプターさくら』（基本的にコミック版がベース。アニメ版はほとんど意識していません）と、『デイクライド』をきっかけに視聴を始めた、平成ライダーシリーズ第五作『仮面ライダー剣^{フレイド}』です。

ただし…えー……

これから読もうと思っておられる皆さまにまず、この作品における大前提というかネタバレというか、「とりあえずこれだけは踏まえてね」っていう事柄があります。

ひとつ。さくらは中学一年生（小狼は日本に帰ってきてます）、剣崎は原作の最終回直後くらいを想定。

ひとつ。今回、さくらは基本的に魔法使いません（！）、剣崎も変身しません戦いません（！！）。

ひとつ。登場キャラクターをかなり限定しています。現段階では主人公二人と、桃矢にーちゃん藤隆さん、ケロちゃん、あと…多分、橘さん。でもちよつとだけ。あと小狼も出したとは思っている。

今の予定ではこんな感じです。

「魔法使わないさくらちゃんなんてカードキャプターじゃない！」

「変身も戦闘シーンもない仮面ライダーなんて仮面ライダーじゃねー！」「私の好きなあのキャラが出てないじゃん！」という方は、

大変申し訳ありませんが、閲覧をご遠慮くださいませ…。
じゃあ何書くんたよって感じですが、とりあえずメインは、私が想像する（というか、こうであって欲しいと望む）「剣崎のその後」。あくまで平和な日常生活をベースに、その剣崎に対してさくらがちよつとずつ絡む、といった内容です。そんなに続かず、あまり緩急もない話になると思います。スリルとかドキドキ感はほぼ皆無でしょう…。

それと、『仮面ライダーブレイド』について。

作者は一応原作全話を視聴しましたが、DVDなどではなく、不精にも画像音質の粗い動画サイトで済ませております…。というかまずリアルタイムで見れてない。本当につい最近ハマったばかりの無礼なルーキーです。ついでに言うと、劇場版のミッシングエースもあらずじは知ってるけど実際未視聴という…。でもいつかは見たい（12/2追記：デイレクターズカット版のミッシングエースを動画サイトにて視聴完了しました！『ブレイド』に対してそれなりに理解は深まったと自負しております。）

こんな感じなので、手元に資料がほとんどない。せいぜいウィキペディアと公式ホームページが頼みの綱状態。『カードキャプターさくら』は漫画も関連資料もあるしファン歴が長くて熟読済みなのでどんと来いですが、『ブレイド』に関しては知識とか色んなところが怪しくなる可能性があります。

なので読者の皆さま、読んでいて「これっておかしくない？」と違和感・疑問等ありましたら遠慮なく指摘をお願いします…。

最後にもう一つ。

この作品は「突発的に書き始めた」としてはいますが、これには色々理由があります。ここでは明言できませんが、知っている方は知っている事情です。

あえて言うなら、この作品は、ある人へのアンチテーゼといったところでは。

とはいえ、作品内容自体には関わらないので、「ふーん、そう」程度で済ませていただければと思います。

長い前書きで申し訳ありません。

よろしいでしょうか？

それでは本編へどうぞ。

序 PROLOGUE

遠くで、波の音が聞こえる。

崖に幾度となくぶつかっては砕ける、激しい波濤の音が。

周りから、草木の音が聞こえる。

風に吹かれて擦れ合う、枯れた葉と枝の音が。

その中で、二人が対峙している。

襟足まで伸びた明るい茶の髪をなびかせ、暗色のジャケットを着た長身の青年と、それよりは幾分か小柄な体にベージュのコートを纏い、短い髪にまばたきの少ない瞳が印象的な青年が。

彼らの姿は、見事なまでにボロボロだった。

上着やコートの布地はあちこちが大きく裂け、はいているジーンズには穴が空き、その下から痛ましいまでの傷口や色の濃い痣が垣間見える。

そして二人とも、しきりに肩を上下させて、乱れた呼吸を繰り返している。

傍から見れば喧嘩中かとも思えるが、それにしても惨憺たる状態だった。

何より、互いが互いに向けている目付きが、尋常ではなかった。

そしてもう一つ、奇妙なことがあった。

血の色だ。

コートの青年が広げた掌に、べったりとこびりついているものがある。

った。

緑白色の、液体。

それだけではなく、彼と向き合った長身の青年の、唇の端や、二の腕の傷からも、同じ色のものがたらたらと滴っていた。

一目見れば、その液体が何なのかなど、すぐには判別がつかないだろう。

だが、それを見てすぐに、何故か分かった。
実際、自分達の体の中に流れるそれとはかけ離れた色を帯びた、その液体が、彼らの中を流れる「血」であると。

長身の青年が、唇を開く。

「

。

、

」

声は、聞こえない。

だが、唇の端の血を手で拭いながらその言葉を口にする青年の目には、強い光が宿っている。

コートの青年の表情が、たちまち歪む。
深い苦痛を堪えるかのように。

「

、

」

コートの青年が、諦めたように呟く。やはり、声は聞こえない。
彼らの台詞だけが、映像編集ですっぽりと取り除かれてしまったかのように。

すると不意に、長身の青年が微笑んだ。
その体に刻まれた傷痕の凄惨さをも忘れさせるかのように、どこま

でも優しく、穏やかな笑顔。
そして、

「、」

コートの青年に、告げる。

そのままゆっくりと、自分自身の背後へ足を踏み出そうとする。

「？」

コートの青年が慌てて引き止めるように言った。

「……。」

……」

長身の青年は笑みを崩さぬまま言葉を返し、静かに、コートの青年に背を向ける。

そして、自分達を囲うように覆い茂った雑木林の中へ、姿を紛れさせた。

自らに、何か——言葉では表せないほどに、重いものを背負って。

「……！」

コートの青年が叫び、追いつがる。

しかしその手が、雑木林の向こうへと消えていく青年に届くことはなかった。

その光景を、彼女はただ、見つめることしかできなかった。

.....
.....
.....

「おい、起きろ。怪獣」

つん、と頬を指先でつつかれるような感覚を受けた拍子に、頭が右側へかくりと傾く。

そして同時に、額を冷たいガラスへ、ごつ、とぶつけた。

「.....いたい.....」

地味に伝わる鈍痛で目尻に涙を浮かべながら、ようやく意識がはつきりする。

ガラスにぶつけた辺りを手で擦り、まだ眠気で重たい目蓋を開けた。伝わってくるのは、移動中の自動車特有のエンジン音と振動。

「アホ面こいて寝てるからだ。そろそろ着くから準備しろよ」

にべもない口調で言うてるのは、斜め前にある助手席に座った兄。その言い様に、むっ、と顔をしかめた。

「あ、アホ面つて.....！ ていうかお兄ちゃん！ さっきまた怪獣つて言ったでしょ！」

「なんだ聞こえてたのか。仕方ないだろ、さっきまで怪獣の唸り声みたいなびきかいてたしな」

「なんですってえー！！」

容赦のないからかいに、手をぐっと握り締めてバックミラー越しに助手席を睨みつける。

「二人ともなかよしさんですね」

運転席でハンドルを握った父が、のんびりとした口調で言う。
普通なら激しい喧嘩をしているのをたしなめる所だが、それでもこ
うして余裕で構えてられるのはさすが父親といったところか。

「なかよしさん」という表現も、あながち間違いではない。

実際、今の程度の小競り合いは、この一家の中では日常茶飯事なの
だから。

「桃矢君、今朝頼んだ青いクーラーボックスも入れておきましたよ
ね？」

「ああ。後ろのトランクに積んどいた」

「実は夕べ作ったアイスクリームが中に入ってたね。コテージに着
いて車を降りたら、それを食べて休憩しましょう」

「ほんと？ やったー！」

父の提案に両手を挙げて喜んだが、その弾みで膝の上に置いていた
バスケットが車の振動に揺られてずり落ちかける。

それに気付いて、咄嗟にバスケットの取っ手を握って落ちるのを防
いだ。

——あぶなかった…

思わずぼつと胸を撫で下ろす。

このまま落としていたら、後で目的地に到着してから怒鳴られてい
た所だ。

バスケットの中で懸命に身を潜めている、小さな同居人に。

「それにしても、よく寝ていましたね。昨日はあんまり眠れなかつ
たのかな？」

安全運転を続けながら話しかけてくる父に、さっきまで自分が座席
でうたたねをしていたのを思い出して苦笑した。

「う、うん…。なんか楽しみで、かえって目が覚めちゃって」

「ここまで遠出するのは久しぶりだからね。さくらさん」

「うん！」

にこやかに言う父に、彼女——さくらは、車窓の外で流れていく風景を眺めながら、満面の笑みで答えた。

？・騷 H A P P E N I N G

——木之本桜、きのもと さくら十三歳。

私立友枝中学校に通う一年生。

所属はチアリーディング部。

好きな科目は体育、苦手な科目は数学。

家族構成は、七歳違いで今は大学生の兄・桃矢と、大学で考古学を教える父・藤隆。ふじたか

元気が取り柄の、ごく普通の女の子。

それでも、何か一つ、ちょっと変わっていることがあるとすれば――

魔法が使える、ということぐらいだろうか。

きっかけは二週間ほど前。

藤隆は同じ学部で宗教学を教えている同僚の講師に、今年の夏は家族で予定はあるのかと聞かれたことから始まった。

その講師は個人で所有する別荘のコテージを僻地に建てており、毎年夏休みに友人や親類、あるいは自分が受け持つゼミの学生などを誘っては、泊まりがけでちょっとした休養をしているらしい。

しかし今年、その講師は台湾へ出張しながらの実地調査をするため、その他の予定との折り合いもあって、夏休み中にコテージへ滞在する時間が取れなくなってしまった。

それで、前から学問的な話でも縁があつた藤隆に、「予定が空いていたら、代わりに行って楽しんで来てもらえないか」という提案が

持ち込まれたのである。

別に、たまにしか行かない別荘のコテージなど放置しておいてもよいのだが、それでもわざわざ他人に頼んだのには理由がある。

その講師の奥さんは綺麗好きで、今年はいつも通りコテージに行けなくなつたという話になると、やれ中の埃が溜まってしまふのではないかと、やれそれなりに整えている庭が野犬に荒らされるんじゃないのか、などと心配し始めたというのだ……

「そのコテージって、わたしたちで自由に使ってもいいんだよね？」

山沿いで蛇行するアスファルトの国道を外れ、少し鬱蒼とした林の中の砂利道へ車が乗り入れられた。

若干揺れの大きくなつた車の中で、さくらが問いかけると、

「ええ。その代わりに、中の掃除とか、荒れていたら庭仕事もしますからね」

「あと、一応空き巣とかに遭ってないかも確認しなきゃならないんだよね」

片手でギアチェンジしながら答える藤隆に、助手席で地図を広げた桃矢が言った。

「え……空き巣って、泥棒？」

「ああ。最近なんかじゃ、そういう別荘をターゲットにした空き巣被害っていうのも多いらしい。普段は空き家同然だけど、中に金目になるものが置かれてたりするから、恰好の餌食なんだと」

「……そ、それって、けっこう危ないよね……？」

「大丈夫だろ。そういう所は大抵、セキュリティ対策はしっかりしてるだろうからな。確認はあくまで念のためだ」

思いがけず出てきた犯罪名にたじろくさくらを横目で見ながら、桃矢は続けた。

「第一、お前みたいな怪獣がいちいちびくつくほどの相手じゃないだろ」

「もー！ だから、さくら怪獣じゃないもん！」

「……怒鳴るのはいいけど、ここからもつと揺れてくるから舌嚙んでも知らねーぞ」

にやーっと口元に笑みを浮かべる桃矢に、さくらはぐっ…と押し黙る。

言うや否や、砂利道を踏む車体がガタガタと揺れ始めた。乗り物酔いしやすい人間だったら気分を悪くしている所だろう。

一応それなりに気遣ってくれているのだ、とは分かっているが、やはり相も変わらずな「怪獣呼ばわり」には腹が立つ。

そのことを除いたにしても、桃矢が何かしら揚げ足を取って馬鹿にする頻度は全く減る様子がない。

この春に中学生となったさくらも受け流す余裕が出てきたが、それでも「怪獣」とか「アホ面」と言われるのは年頃の女の子としてもいい気分ではなかった。

地図を見ながら「父さん、そこ右」などと藤隆に的確な指示をする桃矢に向かって、バックミラー越しにこっそりと「あっかんべえ」をしてから、さくらは窓の外へと視線を投げかける。

車道として機能する程度には舗装された砂利道を囲むように、青々と葉を広げた木々が立ち並んでいた。

葉と葉の合間からは、眩しい八月の夏日が差し込んで、車が動く度にきらきらと瞬くようだった。

今はエンジンと駆動音で掻き消されているが、ドアを開けて外に降りれば、きつとうるさいほどの蝉や鳥の鳴き声を聞けるのだろう。

——さっきまで見てた夢と、ぜんぜんちがつよね……

車窓の向こうの光景を眺めながら、さくらはぼんやりとそんなことを思った。

二人の青年が佇んでいた、どことも知れない林の中。

色を失った枝や幹の表面には薄く霜が降り、葉はほとんど枯れ落ちて、彼らの足元に積み重なっていた。

それに、二人もコートや上着をしつかりと着込んでいたくらいだから、やはりあれは冬場の光景と考えるのが自然だろう――

おぼろげに残っている夢の記憶を手繰り寄せながら、さくらは場面に一つ一つ解釈を加えていく。

カード捕獲者^{キャプター}として務めを果たした結果に得られた、「最高の魔術師」をしのぐほどの魔力。

クロウ・リードの生まれ変わりであるエリオルがイギリスへ帰り、『クロウカード』改め『さくらカード』をめぐる騒動が終結してから、その力についてあまり意識をしたことはない。

それでも、ほんのごく稀に、予知夢や過去夢と思われる内容の夢を見ることもある。

以前はぼんやりと「なんだったんだろう」で流すことが多かったり、内容が曖昧だったりもしたが、カードの守護獣であるケルベロス（愛称・ケロちゃん）やエリオルのアドバイスで、何か気になる夢を見たら、出来るだけ起きてすぐに内容を復習して、見た光景から時季や場所を推測する癖をつけていた。

ケルベロスたちが言うには、さくらの中にある魔力に対する「ちょっとした特訓」なのだという。

この特訓をそれとなく続けていれば、いずれは自分で「見たい」と意識したときに、必要な夢を見て、これからの事に備えるための手掛かりやきっかけを思い通りに得られるようになるらしい。

まだそのレベルに達してないにしても、妙な夢を見たということは――

――これから、何かが起こるってことなのかなあ？

そんな考えに辿り着いて、一抹の不安がさくらの中によぎる。

魔法は長いこと使っていない。使うような場面に遭遇していないの

だから当然だ。

——この年始の頃に限っては、少々例外だったが。

けれど、『さくらカード』を納めた本は、トランクの方に積んだ旅行用カバンの中に入れてあるし、カードを使うための鍵は常日頃から首にかけて持ち歩いている。

何かあってもそれなりに対処は利くだろうが、何も起こらないで欲しいというのが本音だった。

「それにしても残念でしたね、月城君も知世さんも。コテージはけっこう広いらしいから、来れたらきつと楽しめたのに」

ハンドルを操る手は緩めないまま、藤隆がそうぼやいた。

さくらは膝の上のバスケットを抱え直しながら、「うん…」と少し困ったような表情を浮かべる。

小学校以来のクラスメイト・大道寺知世^{だいどうじ ともよ}。

さくらの身の回りでも「魔法が使える」という秘密を共有する数少ない人間の一人であり、『クロウカード』のカードキャプターとして（文字通り）飛び回っていた時から様々な面でサポートをしてくれた大親友。

しかしその実、さくらに手製のコスチュームを着せてビデオ撮影し、記録として残すことに対して異様なこだわりを抱く、という「ちょおおっと」変わった性格の持ち主で、最近は特に「活躍機会がすつかりなくなつて残念ですわ」とこぼしてさえている。

その知世は、夏休みの中頃に迫っている合唱部の全国大会に向けて練習が追い込みに入っており、どうしても抜けられないとの理由でさくらからの誘いを（涙ながらに）断っていた。

そして、桃矢の同級生で、今も同じ大学に通っている月城雪兎^{つきしろ ゆきと}。

月^{ユキ}という名前で、ケルベロスと対にあたる存在で『さくらカード』の守護者という、もう一つの顔（本当はこちらが真の姿なのだが）

を持つ彼は、最近になって大学附属の図書館でアルバイトを始めたそうだ。

そして今回、いつも家族同然の付き合いで一緒に来てもいいはずの所が不在なのは、そのアルバイトのシフトの関係で時間がとれなかったという事情によるものだった。

なんでも、図書館の建物の増改築により地下書庫を整理しなければならなくなり、人手不足で悲鳴を上げているのだとか。

「代わりにデジカメ借りてきたからな。それで色々撮って、帰ったら見せりゃいい」

「うん、そうだね。来れなかった二人の分も楽しんでいきましょう」桃矢の言葉に、藤隆が穏やかに言って軽く落ち込んだ空気を明るくする。

さくらの片手を挙げて「さんせーい！」と、明るい声で言った。

コテージに着いたのはそれから数十分ほど走った後のことだった。覆い茂っていた林が開けた場所に、ちよつとした一軒家ほどの大きな家が佇み、藤隆の運転する車を迎え入れる。

「わーい着いたー！」

車が止まるや否や、真っ先に外へ降りたさくらは、目の前のコテージを見上げる。

自然をそのまま切り取ったような木目模様の、シンプルなデザイン。表のテラスのような所には椅子と小さなテーブルが置かれていて、日光浴もできるような造りになっている。

期限付きだが、今日からここで寝泊りするのだと思うと胸が躍った。

「おい。はしゃぐのはいいけど、まず荷物下ろすの手伝え。怪獣」
「……分かってるってば！ あと怪獣じゃないから！」

助手席を降りながら言葉をかける桃矢に抜かりなく反論を返してか

ら、車のトランクの方へ向かう。

ロックが外されたドアを開けようとして、ふと、片手に下げたバスケットから不自然な振動が伝わった。

一瞬「ん？」と怪訝に思ってから、ハツとした。

どうしよう、と戸惑っていると、

「…ん？　なんだ、ありや」

不意に桃矢が不審そうな声を上げて、車を離れ、さっきまで走っていた砂利道の方へと歩いていった。藤隆もそれにつられて後に続く。二人の視線が外れたことで、さくらはこれ幸いと急いでバスケットの金具を外し、蓋を開ける。

すると、

「——き、きもちわるううう」

背中に羽根を生やした掌サイズの生き物…ケルベロスが、半身をぐったりと這い出させて呻いた。

「ケロちゃん！　だ、だいじょうぶ？」

「…これがいじょうぶに、みえるかああ……」

桃矢たちに聞こえないよう小声で案ずると、いつもはオレンジ色をしている顔を真っ青にして、目をぐるぐると回しながらケルベロスが反駁した。

が、その言葉にはいつもの威勢がない。どうやら、長時間バスケットの中で車に揺すられた挙句、完全に酔ってしまったらしい。酸素不足が祟ったのも原因の一つかもしれないが。

「うおお……ほんまきもちわる……は、はきそう……」

「ほえ?!　ちょ、ケロちゃんそれはまだだめ!　もうちょっと我慢して!」

「いや、あかん……もうあかん。限界——っぷっ」

「け、ケロちゃん……!」

「——おい、何やってんだよ」

口元を手で押さえて、バスケットの隅にうずくまるケルベロスにさくらは慌てふためいたが、そんな気も知らずに桃矢が呼びかけてくる。

無視するのはまずい、と思ったさくらは、

「あ…ご、ごめん！　なんか珍しい蝶が飛んでたから見とれちゃって！」

と適当にごまかしながら、とりあえず蓋を閉めて、苦悶するケルベロスの姿を隠したバスケットを先ほどのテラスのテーブルにのせた。「ケロちゃん、とりあえずバスケットはここに置くから。外に出るんだったら見つからないようにして、ここに戻って来てね！」

小声でそれだけ言い置くと、中から「おおーりよおかい…」と声音だけで満身創痍がみな返事が聞こえる。

それを確認したさくらは、そのまま手ぶらで砂利道の桃矢と藤隆の元へ駆け寄った。

「ど…どうかしたの？」

動揺を隠して尋ねると、藤隆が微妙な表情で振り向き「うーん…」とはっきりしない答えを返した。

小首を傾げたさくらに、桃矢が人差し指で、砂利道の端の方を指し示す。

きょんととしてそちらを見やると、そこには、見覚えのない一台のバイクが停められていた。

青を基調としたデザイン。バイクについてさくらは詳しくないが、見た感じでは桃矢が高校生のときから所有してるものより若干細身で、少なくとも車種が違うということは分かる。

しかし新品というわけでもないらしく、タイヤは前後輪共に泥まみれ、ボディは土埃がこびりついて表面が見えなくなっていたり、傷がついて塗装がはげたりへこんでいたり、お世辞にも綺麗とは言えない様相だった。

ついでに言っと、薄汚れたシートの所に、似たような青のデザインが施されたフルフェイスのヘルメットが無造作に投げ置かれている。

「……なに、このバイク？」

目を瞬かせながらさくらが疑問を口にした。

肩をすくめて「さあな」と答えたのは、桃矢だった。

「来る前から停めてあったみたいなんだよ。誰か置いてったらしいな」

鍵つけっぱなしだし、とハンドルの根元からぶら下がったシンプルなキーホルダーをつつく。

「置いてるってことは、多分持ち主は近くにいるんだろうが」

「でも、こんな所に放置してたら、誰かに持っていかれてしまいますよ。それに今は旅行のシーズンだし、車が入りしたらぶつかっちゃうんじゃないかな」

藤隆が、コテージの本来の持ち主から聞いた話によると、この近辺には他にもいくつか別荘が点在しており、ゴールドデンウィークや、今のような夏休みといった長期休暇の時季になると、人の出入りが頻繁になるらしい。

ついさつき通った砂利道も、他の車を使うことは大いに考えられるだろう。そうすると端に寄せてあるとはいえ、あまり幅がない道に堂々と置かれたバイクは、避けるにしても少々邪魔だ。下手をする、と、車体にぶつけて倒れた拍子に、すぐ横から下っている土手の方へ転がり落ちかねない。

普通の他人だったら素知らぬふりで無視するところだが、それができないのがこの一家揃っての性分である。

桃矢が軽く頭を掻きながら、諦めたように溜息を吐いた。

「……しよーがねえ、持ち主には悪いけど、ちょっと動かすか。さくら、これ持つてろ」

言いながら、シートに投げ置かれたヘルメットを取り上げてさくらに押し付ける。

そして、慣れた動作でバイクの横に立ち、ハンドルを両手でしっかりと握ってから、片足でスタンドをがちゃんと外した。半分浮いていたタイヤが、途端に砂利の上へと沈む。

「手伝おうか？」

そのままバイクを押して、コテージの方へ動かし始めた桃矢に藤隆が話しかけるが、桃矢は「いや、平気だから」と返した。

「……にしても、持ち主はどこのだいっだよ。空気が抜けまくって、タイヤがブヨブヨいつてるぞ……よくこんなので走れたな」

押しながら、砂利を踏んで進むバイクの手応えに桃矢が顔をしかめてぼやく。

他人の物とはいえ、同じバイク乗りとして手入れを怠っているのが少々気に障ったらしい。

自分の愛車を取りに戻ってから、見知らぬ学生に色々と言われるであろうバイクの本来の持ち主に、さくらは哀れみすら覚えて苦笑を浮かべた。

その時のことだった。

——がらがらがらっ！

突然、積み上げられていた何かが一気に突き崩されるかのような、派手な音が林に響き渡った。

あまりの音に、さくらは思わず「ほえっ!？」と声を上げて、抱えていたヘルメットを取り落としかける。

桃矢も押していたバイクを止めて、音のした方を険しい目付きで見やった。

「……なんだ今の」

剣呑な口調で呟いてから、バイクのスタンドを再び立てる。

「……裏手のほうから聞こえたけど……確か、バーベキューとかに使うための薪が積んであるって」

珍しく強張った顔で藤隆が答えた直後、何か争うような声が聞こえた。

はっきりと台詞までは聞き取れないが、とにかく大声で叫んでいる。

——少なくとも、二人。

そしてまた、がらんがらん！という音。

それを合図にしたように、桃矢がバイクを置いてコテージの横から回り込むように駆け出した。

「あつ、桃矢君！」

藤隆も慌てて追いかけて、二人の姿がコテージの陰に消える。

さくらはそれを茫然と見送るしかできなかったが、すぐに気を取り直して、ヘルメットを置くのも忘れて同じように裏手に向かった。

コテージの陰へ駆け込むと、

「おいっ、何してるんだ！」

桃矢の怒声が飛んでくる。

いつもにない剣幕に驚いて思わずヘルメットをぎゅっと抱え込むと、コテージの裏側の勝手口の周りに、薪が見事なまでに散乱しているのが見えた。

桃矢と藤隆は地面にごろごろと転がる薪で足止めを食ったのか、並んで立ち尽くしたまま何かに向かって身構えている。

すると、

「すっ…すみません！ 怪しい者じゃないんです！」

「ぐごごごめんなさい！！ もうしませんッ許してくれええっ！」

狼狽した男の声が二人分聞こえた。

さくらはおそろおそろ近付いて、背の高い藤隆の横から覗き込む。そして、啞然とした。

薪が散らかされている中で、ニット帽をかぶった髭面の中年男が、長髪を明るい茶に染めた若い青年に後ろ手を掴み上げられ、地面に押さえつけられていたのである。

——さくらが驚いたのは、その異様な光景に呆気にとられたから、というだけではない。

中年男をしっかりと押さえながらも、何故か桃矢と藤隆に必死に弁解

するその青年が、あまりにも似ていたからだ。

車の中でうたた寝をしながら見た、夢の中の青年の一人に。

？・騒 HAPPENING （後書き）

勘付いてる人もいるかと思いますが、サブタイトルのパターン化に戸惑っております。

当初UPしたときは、プロローグは「序章」と二文字だったんですが、今日から本編含めて一文字にまとめてみることにしました。んー…こだわり出すとキリがない。

『カードキャプターさくら』本編でも「人に借りた別荘へ遊びに行く」話があつて、一応それを参考にはしたんですが、全く一緒だと読んでも人もげんなりすると思うので、そこまでの経緯とか知世ちゃん・雪兔さんの欠席理由とかを微妙に変えて差別化をはかってみた。

…が、あまりうまくいった感じがしない。ちなみに原作で別荘を貸してくれたのは「数学の教授」でした。

実は以前、別の投稿サイトでも『CCさくら』を使った違うクロスオーバー小説を書いてたことがあるんですけども。その時も悩みの種だったのは、「大学生になった桃矢兄ちゃんと雪兔さんが何を専攻しているか」。

唯一、彼らの大学生設定が使われている劇場版第二弾でも全く触れられていなくて、「どうしようかなー」と考え込んだものです。

お父さんと同じく考古学…って感じでもない。かといって他に候補が思いつかない。

なので、作中では「大学生」としつつも「何を勉強しているか」までは描かないようにしてるんですけど、あまり避けてると不自然になる可能性が…！捏造してもいいけど、それで納得してもらえない自信皆無です。

あとバイク！バイクの扱い取り入れた書き方分かんないよナニコシ。

バイク乗ったことないし二輪免許も持ってないから超難関でした。でも今回の話ではバイクを必須要素としてるんでこればかりは避けて通れない。

知らないことを知ってるふうに書くって大変だね。

次回更新なんですけど、いつ頃になるかちよつと目処が立ってません。ていうか書き続けられるかどうかすら分らないという…。

他の方を見ると週一更新とかすごいコンスタントに進められていて、もう頭が下がらんばかりです。

すくなくとも、今月中には続きUPしたい……。始終こんな感じでやっていきますが、どうか生温かい目で見張ってやってくださいませ。

以上、あとがきという名の弱音のはきだめでした。

車とバイクが並んだその脇に、引つ捕らえられた下手人よろしく二人の男が正座の体勢で項垂れている。

その目の前に、これ以上ないほどの凄みが込もった目付きで桃矢が仁王立ちし、横にさくらと藤隆が心配そうな顔で控えていた。

「……………」

沈黙が、痛い。

自分ですらそう思うのだから、桃矢の敵意に大いに晒されている二人はもつと痛い思いをしているのだろう、とさくらは考えながら、彼らのことをこっそりと観察する。

二人の男は、一目見ても全く繋がりのないような容姿をしていた。

一人は、五十代に差し掛かったくらいの髭面男。色褪せたニット帽は所々がほつれて、今にも穴が空きそうだ。それだけでなく、身に着けた作業着を思わせるつなぎは薄汚れ、生えている髭もファツシヨンのためというより、ただの無精ひげが伸び放題になったただけだろう。髪もぼさばさで、クセがそのまま残っている。

この男は、つい先刻まで地面に押さえつけられながら足を無様にばたつかせて、大声で喚いていた方だ。

もう一人は、二十代前半くらいの若い青年。ただし、桃矢よりも少し年上のように見えた。上は地味な色合いの薄手のトレーナー、下はジーパン、腰に暗色のジャケットを巻き付けている。手首や指の根元にアクセサリーが光っているが、決して派手派手しくはない。

あえて言うなら、首から下がった、剣をモチーフとしたようなシルバーのペンダントが揺れていることの方が印象的だった。明るい茶色の髪の毛先は襟口まで届いているが、髭面男に比べたらずっと整えられている方だろう。

こちらは、髭面男を地面に無理矢理押さえつけるといふ荒技をやつてのけながらも、駆けつけた桃矢たちに必死で弁解をしていた方である。

年齢、服装、その他の雰囲気。

どれをとっても、知り合いとは考えづらい様相の二人組。

一人がもう一人を拘束しにかかっていた、という発見時の状態からしても、同じ穴の貉では^{むじな}ないと見るのが妥当だろう。

「……で、説明してもらおうか。

あんたらあそこで何やってた？」

低い声で尋問する桃矢。

青年の方が引きつった顔で、「え…と、あの…」と口ごもる。すると、

「すいませんでしたッ！」

いきなり、前置きもなしに頭を地面へ擦り付けて土下座したのは髭面男の方だ。

ものすごい勢いで謝られ、さすがの桃矢も一瞬たじろぎ、藤隆とさくらはきよとんとするしかない。そして横の青年の方も「うえ?!」と素っ頓狂な声を上げて驚いていた。

「本当にすいませんッ……つい、その、魔が差して…! ご、ごめんなさい申し訳ありませんっ……う、うううう」

一通り言い終わるや否や、そのまま泣き崩れてしまう髭面男に、困惑しきつた桃矢はばつが悪そうに頭を押さえた。

明らかに不審者だったのはこの髭面男の方だが、これでは逆に桃矢の方が悪質の取り立て屋のようだ。第一、この状態ではまともに話を聞きだせそうにない。

桃矢は溜息をついてから、青年の方をちらりと見やった。

「……おい、あんた。代わりに説明しろ」

「え…あ、でも……」

「分かつてる範囲でいいから。とりあえず説明してくれ」

混乱しているのは青年の方も同じらしい。実際こちらにも不審者に変わりないが、髭面男の方に比べればマシなようなので、とりあえず宥めるように助け舟を求めると、青年はぼつりぼつりと語り出した。

さかのぼること数十分前。

この近辺にたどりついた青年は、運転していたバイクの調子が悪くなったため、仕方なく手押しで歩いていたところ、コテージをうろつく不審者を見かけた。

その不審者こそが、今ここで土下座したまま涙している髭面男で、コテージの周りを歩き回るものの、いつこうに中へは入ろうとしないので、身なりとも合わせて「コテージの所有者ではない」と青年は判断した。

それではばらく、砂利道の向こうから距離をとって遠目に様子を窺っている、髭面男はコテージの裏側へと回ってしまった。

青年はとりあえずバイクを近くに停め、髭面男の後を追ってこつそりとコテージへ近付き、やはり裏へと足を進めた。コテージの壁の陰から覗き込むと、髭面男は青年の存在に気付かないまま、目の前にある勝手口のガラスを軽く見やった。

そして、足元に転がっていた、人間の頭の半分程度の大きさをした石を両手でおもむろに持ち上げ、あるうことかそれをガラス目がけて投げ込もうとしたのだ。

驚いた青年は咄嗟に、「何やってんだ!!」と声を上げ、コテージの陰から飛び出した。

すると、髭面男は石を頭の上に掲げたままハツと動きを止め、突然現れた青年を凝視したまま硬直した。

だがそれも束の間のこと、髭面男は持っていた石を青年に向かって放り投げると、脱兎のごとく逃げ出したのである。

辛うじて石を避けた青年は思わず男を追いかけた。基本的な運動能力の違いのせいか、青年はすぐに追い付いて、髭面男の首根っこを掴んだ。

しかし髭面男も黙ってはいない。がむしゃらに暴れ回って青年の手を逃れると、たまたま勝手口の横に積み上げられていた薪に目を付けて、わざとそれを倒してばらまき、青年を足止めしようと企んだ。だがそれは思ったほどの功を成さず、薪をどうにか払いのけた青年も半分本気になって、男の腕を捕まえると後ろ手に捻り上げ、そのまま取り押さえた。

すると、途端に髭面男が情けない声を上げて謝りながら喚き出し――そこへ桃矢や藤隆が駆けつけて来た、ということであった。

「……要するに、あんたはこの不審者をどうにかしようとして、ああいう状況になったわけだな？」

「……ハイ、そうです」

先刻、コテージの裏手からここまで連れ出すのに歩かせた際、（高校生時代は比較的背の高い部類だった）桃矢よりも青年の方が若干頭の位置が高かったのを、さくらは覚えていた。

しかし今この場面では、青年の方が正座、桃矢の方が仁王立ちという姿勢のため、本来見下ろす方で年上でもあるはずの青年がやたら小さく見えるという実に奇妙な風景が展開されていた。

その上、話を聞くに青年自身は何も悪くないのに、厄介事を引き起こしてしまったという責任を感じてしまっているのか、漂う空気がすっかりしぼんでしまっている。

ちよつと困ったような表情が、なんだか主人に叱られて落ち込む大型犬みたいだなあ、と思わず呑気な比喻がさくらの頭に浮かんだ。

「えーとそれじゃあ、コテージの脇に停めてあったバイクは君のかな？」

桃矢に萎縮しきっている青年を気遣ったのか、藤隆が思い出したよ

うに尋ねる。

そういえば、と青年を改めて見ると、彼の両手には桃矢がよく使っているのと同じ、運転用のグローブがはめられている。全体的に青で彩られているのは、やはりバイクそのものに合わせてのことだろうか。

「…あ、ええ、俺のです。えっと、勝手に停めたりしてすみません」

「いえ、ぼくは構わないんですけど、場所が場所だったんで少し移動させたんですよ。これからは気をつけてくださいね」

「は、はあ……」

顔を上げて答える青年に、藤隆は穏やかな笑みを返す。今度はその屈託のない笑顔に、青年はまた別の意味で恐縮してしまったようだった。

桃矢はそんな二人のやりとりを見ながら深い溜息を吐くと、未だに地面へ突っ伏している髭面男の方へ向き直る。

「……それで、他人の別荘ひとの窓ガラス割りにかかるって、一体何考えてたんだ？ そっちは」

問い詰めると、男はいくらか落ち着きを取り戻したらしく、土下座させていた体をのろのろと起き上がらせ、視線を落としたまま重々しく口を開いた。

男は数ヶ月前、会社のリストラの餌食となり、住んでいた社宅を追い出されてしまった。

その後、なかなか再就職の目処も立たずホームレス生活に追い込まれ、居所を求めてあちこちを転々としていた。

そして、この別荘が点在する界隈に辿り着くと、出入りする家族連れを遠目に眺めながら黒い考えに捕らわれてしまったという。

すなわち、人のいない空き家同然の別荘へ盗みに入る、という考え。金目の物とは言わないまでも、ひょっとしたら日持ちのするインスタント食品くらいは蓄えてあるかもしれない。せめてそれだけでも

手に入れば。

そんなふう企み、たまたま目に付いたこのコテージをターゲットに選び、侵入できそうな所はないかと物色した。

最終的には、車が通りがかる砂利道から見えない裏手の勝手口を見つけ、ガラスを割って中の鍵を開けるために石を手にとった。

ところがそこへ幸か不幸か、一部始終を見ていた青年が現れ、思わず逃げ出してしまったのだ。

その上青年が思いのほかしつこく掴みにかかったため、薪を武器にしたりと反射的な抵抗を試みたが、結局押さえ込まれ、それでようやく自分の行いの愚かさを身を持って知り、とにかく謝罪の言葉を叫び散らしていたということだった。

「……つまり、空き巣を企んだってことか。未遂だったけど」

ようやく腑に落ちたらしく、桃矢はそう話をまとめながら腕を組み、何度も一人頷いていた。

男は再度、「申し訳ありませんでした……！」と涙声を搾り出し、深々と土下座をする。その場しのぎの大袈裟な謝罪でないことは、言動の必死さから窺えた。

「……さっきの話、ほんとうだったんだ……空き巣がいるかも、って……」

少し前、車に揺られながら交わした会話を思い出しながら、さくらは呟いた。だが、

「——さくら、そういう言い方はやめろ」

いつもの“いぢわる”な態度とは違う、強い厳しさを含んだ声音で桃矢がぴしゃりと言いつつ放った。

「言ってることが本当なら、この人はただの素人で、いつも他人の財産目当てに荒らして警戒されてる普通の空き巣とは違う。プロとかだったら、もっと上手い方法で入り込むし、人に見られてるのも気付いただろうしな」

そう咎めながら、未だ頭を垂れている男を見下ろす桃矢の表情には何とも言えない苦々しさが滲んでいる。

それを感じたさくらも、自分の言葉を思い返してから、素直に「ごめんなさい…」と謝った。

この男は、少なくとも好きで空き巣をしようとしたわけではないのだ。見つかって逃げ出した、というのは少々いただけないが、当たり前の反応と思えばまだ許せる範囲だろう。そして今もこうして、罪悪感に苛まれてとにかく頭を下げている。

そんな境遇に追い詰められてしまった男の身の上に胸が痛むのか、藤隆も浮かない顔をしていた。

「……あの」

不意に青年が声をかけて、木之本家三人はそちらを見やった。さっきまで桃矢に威圧されて挙動不審になっていた青年は、正座をしたまま、さくらたちのことを真っ直ぐに見ていた。

——あ……。

さくらは息を呑み、なりゆきで持ったままになっているヘルメット——おそらくこれも青年の持ち物だろう——へ掛けた手に、思わずぎゅっと力が込もった。

青年が、静かに言葉を続ける。

「すみません…その。俺が言えた立場じゃないって分かってるんですけど、お願いがあるんです。

——この人のこと、見逃してやってくれませんか？」

その台詞に、一番驚いたのは髭面男だった。

がば！と弾かれたような勢いで顔を上げ、隣に座る青年を凝視する。「話聞いていると、色々理由あったみたいだし、今もすごい反省してるし……だから、もうこういふことはしないと思うんです。俺だっ

て、止めるにしても、もつと、こう……穩便に収められたかもしれないのに、怒鳴り込んだり掴みかかりたりしちゃったし。それに、本当に、未遂だから！ だから、今回だけでも大目に見てほしいんです！」

一通りそう述べると、青年は両手を地面につき、まるで男がしていたことをなぞるかのように仰々しく頭を下げた。

「お願いします……！　せめて、警察に通報だけは勘弁してください！　なんなら、俺も責任取りますから！」

「……いや、あんた……責任取るって、何するんだよ？」
戸惑ったように桃矢が聞き返すと、とりあえず頭だけを上げた青年が「うつ……」と一瞬口ごもる。

しかし、すぐに何かひらめいたように再び口を開いた。

「あの、ひょっとして今日からここで滞在とかするんじゃないですか？」

「……はあ？」

「今、夏休みのシーズンだし……家族旅行ってやつですよ。だったら、手伝わせてください！　料理とか得意なんです。ちよつとした家事手伝いくらいはできます！」

「だから、そういうことじゃなくて――」

一方的に捲くし立てる青年に、桃矢は呆れ果てたように頭を押さえる。藪から棒に何を言い出すんだ、と訴えるかのように。

庇われている髭面男も、自分を捕まえようとするまでは何の面識もなかった青年のとっている言動に啞然としており、突拍子もない申し出にさくらと藤隆もきよととするしかない。

「と、とにかく、この人のこと許してあげてほしいんです！　お願いします……！」

「いや、あのな、それは、……。父さん、どうする？」

必死に食い下がられて、とうとう根負けしたらしい。

桃矢はいつになく困りきった顔で藤隆の方を振り向いた。藤隆は口の端で、くすり、と苦笑する。

「そうですね……じゃあ、」

言いながら、青年と、髭面男を順に見て。

「——とりあえず、裏で散らかった薪を積み直してもらえますか？」

そう藤隆が告げると、二人は一瞬目を見開いてから、ほとんど同時に「はいっ！」と返事をしていた。

？・経 PROGRESS (後書き)

始まって早々の更新停滞を覚悟していましたが、思いのほか筆が進みましたので二話目をUPしました、みけぺんです。

これくらいがちょうどいいペースだとは分かってるんですが、多分来月からはこうはいかないと思います。プライベートが「それどころじゃねー！」状態に突入する予定なので……。

前回より少々短めなんですが、理由があります。予定では、今日の更新分でもっと進行してて、青年の名前（もう分かっていると認めますが）も明らかになるところまでいくつもりでした。

しかし、書き上げてみたら容量が第一話に比べてべらぼうに重かったので、結局の所は二話に分割するという苦渋の決断。にしてもキリが悪いな……。

次回はもうちょっと話が動いている予定です。帳尻考えながらの執筆ってほんとむずかしい。

以下、超余談。

サブタイの表記ルールですが、「話数・漢字 英語」となってます。こたわりというか理由があつて考えた表記形式です。

話数は置いといて、漢字と英語は基本的に意味が対応しております。前回は終盤のドタバタがメインだったので騒動（ハプニング）と名付けました。簡単です。

そして今回は「なんであんなことになっちゃったのか」という状況説明が主だったので、電子辞書に「経緯」の英訳をお尋ねしたところ、物事の一部始終や経過という意味で progress がヒット、サブタイに使ったという次第。同時に progress は前進・進歩・なりゆきという意味もあるので、この出会いから徐々に発展していくということではぴったりかなと判断しました。

——「ここで問題です。いずれ作中にも登場する、「漢字と英語」が対応しているものといえば？」

正解は『さくらカード』。漢字に英語の読みや名称が振られているという形式にヒントを得て、サブタイもそのように合わせました。当初はあまり考えてませんでした。が、ちよつと遊んでみようかなーと。今後続くか分からないけども…。

さらに余談。

最近、某SNSの日記でよくオンドウル語を使っていたせいか、執筆中に作中の台詞で「何やってんだ!!」と打ち込んだら、半角力ナ文字で「ナニヤツテンダ!!」と真っ先に変換されてしまい、思わず啞然。

なんかもつ、うん……。色々ごめんなさい。

？・ 紹 I N T R O D U C T I O N

地面にまんべんなく散乱した薪を残らずかき集めて積み上げるのは、思いのほか骨の折れる作業だった。

元々、薪は一本一本がただ重ねてあったのではなく、数本ずつ束にして縛ったものをまとめて積んでいたので、まずそこから始めなければならぬ。

結び目が解けたり、束ねた薪だけがすっぽ抜けてしまった紐を拾い集め、薪をしっかりとまとめてもう一度結び直す。

そしてその薪の束を、崩れないように気をつけながら積み上げる。最初は責任をとるといふことで青年と男だけが作業をしていたが、予想していたよりも時間がかかったため、居た堪れなくなつた桃矢や藤隆が手を貸し始めた。さくらもとりあえずヘルメットを脇に置いて、薪を拾つては手渡す、という程度の簡単な作業に加わつた。さくら達がコテージに到着し、青年と男の騒動を目の当たりにしたのは昼を過ぎた頃だったが、ようやく勝手口の横に薪を積み上げ終えた時には、日はすでに傾きかけ、山の向こうがうつすらと赤くなつていた。

「本当にいいのですか……通報もしないで」

藤隆の言葉に、男は信じられないと言わんばかりの調子で聞き返す。「ええ。未遂は本当のことですし……実はこの別荘も、ぼくの物ではないんですけど、あなたが懲りたことはよく分かりました。色々理由もあつたみたいでしたから」穏やかに言葉を掛けられ、男の表情が申し訳なさそうに歪む。

「そういうあなたこそ、本当にいいんですか？　せめて一晩だけでも泊まっていけば……」

「いえ、その必要はありません」

心配そうに言う藤隆だったが、男は謝り倒していたときとは打って変わってしつかりとした態度で、申し出を遮った。

いわゆるホームレスで定住のできない男を気にかけた藤隆は、それならコテージで寝泊りしないかと話を持ちかけたのだが、男は意外に頑なで、「それはできない」ときっぱり言い切ったのである。

「見逃してもらう上に、責任もこの程度で済ませてくれたというのに、寝所まで頼るなんていうのはさすがに図々しいでしょう。ここから少し下ったところに、休憩所があつたはずですから……今日はそこでどうにかします」

そう答えた男の目に迷いはなく、藤隆もそれを悟つてか、素直に「……分かりました。気をつけてくださいね」と言った。

「あの……ずっと一人で生活してきたみたいですけど、家族とか、たよれる人とかついていないんですか……？」

さくらが、ふと浮かんだ疑問を口にする、男は一瞬寂しげな目を見せてから空笑いをした。

「いや……二年くらい前に別れた女房と娘がいるんだが。どんな顔して会いに行けば分からんし、第一、行ったところで門前払いがオチだろうから、諦めてるんだよ。期待に沿えなくてすまないね、お嬢さん」

「そんな……」

別れた、と言われて、さくらはすぐに返す言葉が見つからなかった。いわば大人の事情というものだ、中学生の自分が首を突っ込んでもいいような話題じゃない。

分かつてはいたが、それでもさくらは言わずにいらなかった。

「……でも！ やっぱ、一回だけでもいいから会ってみるべきだよ！ 追いはらわれたり、話ができないって分かつてても、でもやれることはやっておかなきゃ、絶対後悔します！

それに……ひよっとしたら、おじさんのこと心配してるかもしれない

いし、百パーセント会えるわけがないなんて言えないでしょう？
だったら――」

とにかく、勢いに任せてさくらは口にした。

偉そうな態度をとっているという自覚はある。しかし、このまま男がただふらふらと放浪するしかないと考えるといたたまれなかったかと言って、金や物を恵んでやればいいというわけでもない。それならばせめて、この男自身がなんとかできるような手助けをしなければ。

何より、家族からも見放されたままなどあんまりだ。

「さくら、人にはそれぞれの事情ってモンがあるんだ。そんな簡単に……」

「……いや、お嬢さんの言う通りだ。私が臆病がつて、どうせ会えやしないと……そう決め付けたいだけかもしれない」

桃矢が宥めようとした傍で、男は呟いた。

そして、さくらの目を見つめ返す。

「別れておいて今更と言われるかもしれないが……そうだな。近い内に、会いに行ってみよう。追い返されたら、その時はその時でなんとかかしてみろかな」

今までと違った、少し前向きな声音に、さくらは笑顔を浮かべた。

藤隆もホッとしたような表情を見せ、桃矢は「やれやれ……」とぼやきながらも、安堵したように溜息をついていた。

すると、

「あの……本当にすいませんでした。いきなり掴みかかりまして」と、青年がいそいそと近付き謝罪を口にする。

それから、腰に巻きつけていたジャケットの内ポケットをおもむろに探り始めて、ビニール包装された何かを取り出した。

「……これ。途中のコンビニで買った安物で、しかも潰れちゃってるんですけど……よければ食べてください。ほんのお詫びです……」

男が受け取って見てみると、それはアンパンだった。無理矢理ポケ

ツトに押し込んでいたせいなのか、確かに形は潰れていて、お世辞にもおいしそうとは言えない。

しかも自分で「安物」と言ってしまったている。そんな物を詫びに差し出すというのはよほど礼儀知らずなのか、あるいは――差し出せるのが、どう頑張ってもそんな物くらいしかない、ということなのか。

さくらとしては、理由は後者だろうと思っている。赤の他人である男を庇ったり、薪の片付け作業に真面目に取り組んでくれていた姿を見て、彼が悪い人間ではないというのがよく分かったからだ。

アンパンを手にした男は、青年のことをしばし凝視していたが、やがて、ゆっくりと微笑んだ。

「……………ありがとう。夜食にでも、いただくよ」

そう言ってアンパンを大事そうに抱えた男に、青年も屈託なく笑った。

――男はそのまま、もう一度深々と礼をした後、コテージに背を向けて砂利道を下っていった。

それを見届けると、さくらは桃矢から預けられっぱなしになっていたヘルメットを、青年に差し出した。

「あの、これ。お返ししますね」

青年は、ずい、と目の前に出されたヘルメットに思わずたじろいだようだったが、

「…ああ、ありがとう」

と礼を言いながら受け取る。

そして、それを小脇に抱えると、桃矢が車の横に移動させていたバイクの方へと歩み寄った。

「…ところで、あんたはどうしてこんな所まで来てたんだ？ 近くの別荘とかに泊まってるのか」

桃矢が尋ねた。

そういえば、髭面の男の方はなりゆきで身の上話も聞かされたが、この青年に関しては「たまたま通りがかった」としか打ち明けられていない。

通りがかったにしても理由があるだろうし、もし何か用事があつて来ていたのなら、ここで時間を潰したために予定が狂ってしまった可能性も考えられる。

「いや…そうじゃないんです。俺は何ていうか……さっきの人とは違うんですけど、ちょっとした一人旅みたいな感じで。泊まる所はこれから探します」

「……一人旅、ね」

——要するに、さっきの男と基本的には同じ感じが。

木之本家三人が同様に、そんな結論へと達した。

よく見てみれば、青年はバイクの他は着の身着のまま、荷物らしい荷物も持っていない。多分、行き当たりばったりでどうにかしながら生活してきた、といったところだろう。

「でも、これから泊まる所を探すにしても、もうじき暗くなってしまうよ。この辺りは宿もないでしょうし…大丈夫ですか？」

「あー……その時は、適当に野宿でもします」

「ぼくは詳しくないからはずきりとは言えないんだけど…この辺、夜中になると野犬とか熊が出るって聞いているんです。それで野宿っていうのは、ちょっと危ないんじゃないかな」

けろりとした顔で言つてのける青年を藤隆が気遣う。

すると、青年は何故か自嘲気味に目を伏せて、ぽつりと呟いた。

「——平気ですよ。今の俺は……何があつても」

どこか含みのある言い方に、藤隆と桃矢が眉をひそめる。

そしてさくらは、青年の口元に浮かべられた笑みに、また息を呑んだ。

——やっぱりそうだ……。この人……

最初に顔を見たときから考えていた可能性。それがようやく、さくらの中で確信に変わった。

青年はそんなさくら達を尻目に、ヘルメットを頭にかぶり、バイクのハンドルへ手をかけて、スタンドを足で蹴って外す。

「……それじゃ、ご迷惑おかけしました」

少しくぐもった声で軽く会釈し、バイクを砂利道に向かって押し進めようとする。

藤隆と桃矢は、青年の言葉に差し挟む余裕がないと思ったのか、黙ってそれを見ているしかなかった。

——しかし。

「待つてくださいー!!」

気が付くと、さくらは声を上げていた。

急に引き止められ、青年が足を止めて怪訝そうに振り向く。

「……あの、あの……」

咄嗟に止めたはいいが、その先が続かず、さくらは無意味に口を開閉させた。

だが、ふと青年が押しているバイクに目が行き、さらに昼間にここへ来たときのことを思い出すと、青年に言った。

「……あの！ そのバイク、最近お手入れとかしてないんですか!？」

年端もいかない、ましてや免許取得が認められる年齢にも達していない少女の口からバイクの話題が出てきたのがよほど意外だったのか、青年は一瞬反応を忘れていたようだった。しかし、すぐにヘルメットのシールドを指で押し上げて、直接視線を合わせてきた。

「……ああ、確かに最近はあまり、メンテとかもできてないけど……それが何——」

「そついえばお兄ちゃん、このバイク動かしたとき『タイヤの空気

が抜けてる』って言ってたよねっ!？」

青年が言い終わるか否かのタイミングで今度は桃矢に話をふる。

桃矢は目をしばたかせてから、「あー…まあな」と曖昧に答えた。
「あの…！ バイクって、ちゃんとお手入れとかしてから乗らないと危ないと思うんです！ この砂利道なんか特に！ あと、お兄ちゃんも乗ってるからたまに見たりするんですけど、バイクのタイヤって自転車と違って直接交換しないといけないくて、けっこう大変なんですよね！ だから、今日はここにとどまって、ついでにきちんとお手入れしてから出発しませんか！？ 事故とか起こってからじゃ遅いし…！」

「いや、でも…そこまで世話になるわけには…」

「大体、タイヤ交換するにしたって、俺は旅先にスペアを持ってきたりしねーぞ。今日だって車だったしな」

さくらの申し出に青年が渋り、さらに桃矢が正論で追い討ちをかける。

「うつ…」と言葉に詰まると、藤隆が声を上げて笑った。

「それなら心配ありませんよ。…ここを貸してくれた先生から聞いたんですけど、毎年ゼミ生を誘うと、何人かがバイクでやって来ることがあるんだって。それで一昨年あたりから、念のためにバイク用のスペアのタイヤもコテージに常備してるそうです」

「……えっ、それじゃあ——」

「コテージの中を探してみれば、多分どこかにありますよ。それと整備用具とかも。明日、本人に電話して、使ってもいいか確認してみますね」

思いがけず得られた助け舟に、さくらの顔へ笑みが広がる。そして、改めて青年の方を見た。

青年は話の展開についていけず、戸惑っているようだ。その傍へ、藤隆はそつと歩み寄る。

「……ぼくが言うことじゃないかもしれないけど、君がいてくれたおかげで、このコテージは被害に遭わずに済んだし、さっきの人も

罪を犯さずにいられた。それに、やっぱりこれから泊まる所を探すっていうのは大変だろうし、ここでこうして会えたのも何かの縁だと思っんです。

遠慮しないで、今夜はここで過ごしていきませんか？」

「で……でも、せっかくの家族旅行なのに、邪魔するのは——」

藤隆の誘いにも青年はなかなか首を縦に振らない。

そこでさくらが、

「邪魔なんかじゃないです！ それに、お父さんいつも言ってるよね。『人数は多いほうが楽しい』って」

車の中でも口にしていた言葉を引き出すと、「ええ、そうですね」と藤隆はにこやかに答える。

「——バイクの整備していくんだったら、明日だけじゃ足りないかもな」

半ば諦めたような響きすら含ませて、桃矢が言った。

「さっき移動させたとき、タイヤだけじゃなくてあちこちガタがきてる感じだった。点検くらいは徹底的にやっとくのがいいと思う」

「……おっ、押しただけで分かるのか？」

「……ガソリンスタンドでバイトしたときに、色々覚えさせられたんでね」

かなり長いこと整備をしてなかったらしく、易々と言い当てた桃矢に青年が啞然とした様子で聞き返す。

さくらはほとんど常套句のように「お兄ちゃんって、本当にどこでもバイトしてるよね……」と隣でぼやいた。

「それに、ここに泊まっていくっていうのは、むしろ気の毒なくらいだと思っぞ」

桃矢にそう続けられて、青年が「えっ？」と不審な声を上げる。

さくらも言葉の意味が分からずに小首を傾げると、桃矢はさくらの顔に目を落とし——にやーっ、と、あのいぢわるな笑みを浮かべた。

「——なんてったって、よく吠えて、家の中をでかい足音で闊歩する怪獣と一緒に過ごすんだからな」

言い切った瞬間、さくらはぎろつと桃矢を睨み、すかさず足の甲を靴で思いつき踏みつける。

桃矢が低い呻き声を漏らして沈黙し、その様子を見せ付けられた青年はぼかんとしていた。

そんな兄妹二人をにこにこ眺めながら、藤隆が言葉を引き継ぐ。

「まあ、ぼくたちはこんな感じですから、気楽にしていってください。とりあえず今の所は、五泊くらいする予定なんですけど……どうかな？」

「……………」

顔色を窺うように尋ねられ、青年はヘルメットの中で躊躇うように視線を泳がせ、黙り込んでいた。

そしてバイクのほうを見ると、倒さないように支えたまま、ボディをグローブの指先で軽く撫でる。さくらの目には、その指先がバイクに残された擦り傷を気遣わしげになぞっているように見えた。

やがて、青年は軽く息を吐くと、外したスタンドを再び立て直した。深くかぶっていたヘルメットに両手をかけて、ぐっ、と外すと、さくら達の方に向き直る。

「短い間ですけど……世話になります」

丁寧に頭を下げる青年に、藤隆はにつこりと微笑んで頷き、さくらもぽあつと顔を明るくし、桃矢はようやく出された結論に軽く肩をすくめた。

「あつ。わたし、木之本桜です！ 友枝町に住んでる中学一年生です。よろしく願います！」

さくらが張り切って、真っ先に自己紹介する。

すると、青年は軽く微笑んで「よろしく」と答えた。

「ぼくは藤隆といいます。さくらさんの父親で、大学で考古学を教えます。それでこっちが、さくらさんのお兄さんで——」

「木之本桃矢。大学二年」

続けて二人も名乗る。といっても、桃矢は若干ぶっきらぼうな態度をとっていたが。

青年は名前と顔を一致させるように、三人のことを順番に見てから、初出勤の社員のように姿勢を正し、ゆっくりと告げた。

「――俺は…剣崎。剣崎一真です。よろしく願いします」

こうして、さくらたち木之本家と、剣崎一真の、束の間の共同生活が始まることとなった。

？・ 紹 I N T R O D U C T I O N （後書き）

一週間も経ってませんが、とりあえず暇な間に勢いでUP。ていうか、剣崎がずーっと「青年」から昇格しないのが自分自身でもどかしすぎて、辛抱たまらずやつちまった感じです。

とりあえず、剣崎くんの別荘居候決定。でも流れに若干こじつけた感が漂っています。

木之本家の旅行期間をどのくらいにするかで少々悩みました。とりあえず五泊と言ってますが、ひよっとしたら都合により延びたり縮んだりして、修正加える可能性があります。

最終回後の剣崎くんは野宿なんて当たり前な生活なんだろうなあ。バイクはともかく身一つで放浪してただろうし。だから木之本家の誘いはこれ以上ないものなんだろうけど、やっぱり……ね。

前回に続いてまたまた余談ですが、私は剣崎くんがヘルメットをかぶってから、シールド（顔の前面を覆う透明なカバーみたいな部分です）を指でぐいって押し上げる仕草がなんだか好きでした。なので作中にも入れてみました。それだけです。

？・情 SYMPATHY

「好青年」を絵に描いたような人間。

それが、さくらたちの抱いた、剣崎一真の第一印象だった。

日が落ちかける中、剣崎は藤隆や桃矢が車から荷を下ろすのをすすんで手伝い、鍵を開けたコテージへと運び込んでくれた。

「友枝町って……どの辺りにありましたっけ」

そんなことを言いながら、両手に大きなカバンをそれぞれ二つずつ、さらに肩から器用にクーラーボックスを引っかけている剣崎。

身長割に体躯が細いとは思っていたが、さらにその見た目に似合わず意外と体力があるらしい。荷物の重さで足元がもつれるということもなく、せっせと運んでいく。

「東京タワーの近く、かな。穏やかでいい町ですよ」

「東京から来られたんですか。へえ……えっと、これどこに置きますか？」

「うん、とりあえず……リビングの方をお願いできるかな？ あ、クーラーボックスは台所で」

尋ねられて、藤隆は電気を点けたコテージの中を見回しながら指示をする。

剣崎は嫌な顔一つせずに「はい」と明るく答え、言われた通りにしてくれた。

「……さすがに空気がこもってるな……。真夏だし、仕方ないけど」
遅れて玄関から上がった桃矢が顔の前でぱたと手を振りながらぼやく。

本来のコテージの所有者によれば、約一年間ほどずっと閉めっぱなしにしていた家の中だ。嫌な臭いがする、というほどではないが、

夏の暑さも手伝ってむっとした空気は少々こたえる。

「まず窓を開けて、風通しをするのが先かな……。そうしたらテーブルの上とかを軽く拭いて、夕飯にしましょうね」

「分かった」

「あ、俺も手伝います」

「わたしも！」

「うん。あと、虫が入ってくると思うので、網戸は閉めておいてください」

「はい！」

そう返事をしながら、さくら達と剣崎は部屋のあちこちに散り、カーテンと窓を開けていく。

コテージにはテラスと繋がったリビング以外に、その奥のカウンター付きキッチン、複数人で一度に入れそうな広めの浴室と洗面所などがあった。

さらに二階へ続く階段も見つけたさくらは、

「お父さん！ わたし、上の部屋も開けてくるねー！」

と、うきうきとした気分でリビングに声をかけてから、答えも聞かずにばたばたと駆け上がった。その足音を聞いた桃矢が「…怪獣」と小さく呟いたのはあずかり知らぬところだ。

階段を上がりきると、部屋のドアがいくつか並んでいる。適当にすぐそばのドアを開けると、ベッドが二つ、そしてスタンドライトが用意された横長のデスクが壁沿いに一つ。

多分、度々招待するというゼミ生のための勉強部屋を兼ねた寝室のような所だろう。

ベッドにはマットレスしか置かれていなかったが、すぐ横にクローゼットを見つけたので開けてみる。思った通り、中には枕やシーツ、掛け布団が畳んでしまっていた。

しかも下の方には、服が収納できるタンスも置いてある。

「すごい！ ここなら、夏休みの宿題もできるよねっ」

いたれりつくせりな部屋の内装にさくらは喜びつつ、カーテンと窓

はしっかり開けて、また別の部屋へ行こうとする。

その時のことだった。

廊下に出たところで、がたん、と音がした。

「——ほえ？」

さくらは立ち止まり、後にしたばかりの部屋を振り返って、もう一度中を覗き込んだ。

クローゼットはちゃんと閉め直してある。窓から吹き込む夏風でカーテンが揺れてはいるが、他に煽られて倒れたり動いたりするような物はない。

気のせいかと思って首を傾げると、また、がたっ……と音が聞こえた。そこで気付いた。音は若干くぐもってはいたが、部屋の中というよりも、廊下の方からしている。

覗き込んだ部屋から視線をはずして、さくらは周りをくろりと見回した。そして——見てしまった。

廊下の突き当たりにある細長い窓のガラスに、丸くてオレンジ色をした何かが、べったりと顔を押し付けているのを。

『さあああくううらあああ!!』

「ほつ——……!？」

こちらに向けられた恨みがましい目つきに、ゴムボールのごとく潰れた顔、そして地の底から這うような低い呼び声に思わず悲鳴を上げかけ、さくらは慌てて口を手で塞いだ。

条件反射のように階下の様子を窺って、藤隆たちが見に来る様子がないのを確かめてから、いそいそとその窓の方へと歩み寄る。

中から施錠を外してやると、ガラスに張り付いていた顔——もといケルベロスが、不平に満ち満ちた目でさくらを睨みながらも、細く開けられた窓の隙間から屋内へと体を滑り込ませた。

「け、ケロちゃん……おどかさないでようー」

「何言うてんねん……人を外に置きっぱなしにしたのをすっかり忘れとったくせに……！」

「だって、なんかいろいろドタバタしてたから……。車酔いは治ったの？」

「——しばらく外の空気吸って休んだら、具合よくなったわ」

窓の傍にしゃがみこんで、下に聞こえないよう顔を突き合わせてひそひそと小声で話す。確かに、手の平の上で腕を組み、あぐらをかきながら頬を膨らませるケルベロスの顔色は、昼間よりかは明らかに良くなっていた。

「そのおかげで、帰って来てみたら締め出されかけたけどな」

「……ごめんなさい……」

完全にへそを曲げてしまったケルベロスに、さくらは渋々謝罪を述べた。あとでお菓子持って行ったほうがいいかも……と胸の内で思いながら。

「そういえば、さくら。さっき下の部屋覗いたら、桃矢にーちゃんとかがう知らんやつがおったけど、一体だれやねん？」

「剣崎さんのこと？　なんか一人旅をしてて、たまたま通りがかつたんだって。しばらくここに泊まることになったの」

「ひとりたびー？　なんや、うさんくさい理由付けやな」

「——そういう言い方ってないと思うけど」

ケルベロスが下した剣崎に対する一方的過ぎる言い草に、さくらは少々眉をしかめた。

現在の『さくらカード』——もとい、かつての『クロウカード』の守護獣として創られた存在・ケルベロス。

しかし、小さなぬいぐるみ以外のなんでもない見た目と大阪弁の喋り口が、その壮大な肩書きや名前とはあまりに不釣り合いなのも事実。ひとたび金色の毛並みを持つ、本人曰く「かつこいい」真の姿に戻ったとしても、初めて会ったときから使い古されている「ケロちゃん」の愛称でさくらや知世から呼ばれることには変わりないし、大

阪弁も食い意地の張り加減も相変わらずだ。

そんなケルベロスは思ったことをすぐ口に出してしまうことがあるので、さくらはその物言いに少々頭を悩ませたりもしていた。

——実際、今でも勝手に「小僧」呼ばわりを続けているせいで、顔を合わせては口喧嘩に発展してしまいそんな相手が身近にいるのだから。

「とにかく、今はどこかに隠れてて。二階ならしばらく誰も上がってこないだろうし」

「はあー。せつかくの旅行やつちゅうのに、かくれんぼか……。わいはいつになったら自由に飛びまわれるのやら」

「だったら家でお留守番してればよかったでしょ！ 自分から『行きたい』って言ったの、ケロちゃんじゃない」

文句を垂れ始めたケルベロスに、さくらは反論を返す。

いつの間にか自分が部屋の窓を開けに来ていたことも忘れて、すっかり話し込んでしまっていた。

——だから、気付くことができなかったのだろう。背後の階段を軋ませながら近寄ってくる、一つの足音に。

「せやかてなあ、あんなだっ広い家に一人でいるつちゅうのは、ある意味拷問やで……」

「じゃあ、とにかく今は我慢して——」

「……誰と話してるんだ？」

突然、背後からかけられた声に、さくらは「ほええっ?!」と変な声を上げて硬直した。

驚いた勢いで、しゃがんでいたのがそのまま床に座り込んでしまい、さくらはおそろおそろ顔を振り向かせる。

そこには、上りかけの階段に立ち尽くして目をぱちくりさせている剣崎の姿があった。

どうやら軽く声をかけたただけにもかかわらず、さくらに思いつき驚かれたことに、彼自身もまたびっくりしたらしい。

半ば固まった表情で、「…わ、悪い、おどかした？」と、どもりかけながら尋ねてくる。

「い、いえ！ すみません、わたしこそ大声出しちゃって…！」

「…や、いいよ……。ていうかこっちこそ、ごめん…」

慌てて立ち上がり、瞬時に状況を理解して大人しくなったケルベロスを素早くワンピースのポケットにひそませながら、さくらが取り繕うと、剣崎も申し訳なさそうに返した。

その表情が、昼間、桃矢に状況説明をしているときに見せた、あの“叱られる大型犬”を思わせるものだったので、さくらはそれを思い出して苦笑しそうになる。

「……？ なに、何かおかしい？」

「あつ、な、なんでもないです！」

「それより、さっき誰かに話しかけてなかったか？」

剣崎に指摘されて、ぎく、と一瞬動きが止まる。

「えつと…ひ、ひとりごとです！ 最近、なんかすぐ口に出しちゃうのが癖になっちゃって。直さなきゃなーとは思ってたんですけど」

「へえー、そつか……。あつ、このカバンとバスケット。君のдар？」

さくらの言い訳を素直に信じると——ぬいぐるみサイズのケルベロスの姿は、さくら自身の体に隠れて見えなかったようだ——剣崎は片手に提げていた物を差し出してみせた。彼が持っていたのは確かにさくらの荷物だ。どちらもデザインが女の子向けだったので、すぐに分かったのだろう。

> i 4 2 0 2 — 5 4 3 <

「はい！ すみません、わざわざ持ってきてもらっちゃって……」

「いいって。厄介になるのはこっちのほうだから、これぐらいはしない」と

気さくな笑顔を浮かべながら、明るい口調でそう言いつつ荷物をさ

くらの手に引き渡す剣崎。

表裏を感じさせない柔らかな笑みを向けられていると、知らずとさくらの心境もほぐれていくような、そんな感じを受ける。

明らかに目上である藤隆や、さっきまで警戒心を剥き出しにされていた桃矢に対しては、きわめて丁寧な物腰で接している剣崎だったが、年下のさくらに対してはほとんど自然体でいるようだ。

だがその自然体は決して嫌なものではなく、むしろ話していてほつと安堵すらさせられる。

すると、剣崎は不意にそわそわし始めて、「あのさ……」とぼつが悪そうに軽く頬をかいた。さくらはその様子にきょとんとしつつも、次の言葉を待つ。

「その……なんか、ありがとうな。色々」と

「……ほえ？」

「いや……さつき、バイクで出ようとした時。本当のこと言うと、泊まる所探しても無駄だろうって分かって、野宿覚悟してたんだよな。でも君が止めてくれて……まあ、バイクのメンテもそろそろしたいとは思ってたけどさ、引き止めてくれたおかげで、色々助かった。本当にありがとう」

ずつと年下で背の低い自分に向かって、また律儀に頭を下げる剣崎を前にして、さくらはふるふると首を横に振り、

「そんな、お礼言われるほどのことじゃ……！ わたしの方こそ無理に引き止めたりして、迷惑だったんじゃないですか？」

と問い返した。

「一人旅をしている」というのが本当か嘘かはともかくとして、剣崎がバイクを駆りながら、どこかを目指していたのであるうことには変わらない。ここに来たのも、あの空き巣未遂の男を止めることになったのも、単なる偶然で、いわば「通りすがり」だったのだ。実際剣崎自身も、さくらがあのまま何も言わずにいたら、すぐに出発してしまうつもりだった。

それを色々と理由をかこつけられてまで、留まるように言われたと

なれば、迷惑に思うこともあるだろう。

しかし剣崎は、どこか困ったような笑顔で、静かにかぶりを振った。
「いいんだ、気にするなよ。どうせ行く宛てもなくて、適当に走ってただけだったし」

「そうなんですか？」

「ああ。……ま、しばらく君にも迷惑かけるだろうから、代わりに何か手伝えることがあったら、なんでも言ってくれよ」

「はい……」

さくらが答えると、剣崎はそのまま階段を上りきって、脇にあったドアへ手を掛けた。

「窓開けてる途中だったんだよな？ 俺もやるから」

「あつ、助かりま——や、やっぱりいいです！」

「へ？」

何かを訴えるように、もぞり、と動いたポケットの感触を受けて、さくらは自分の言葉を訂正しながら剣崎の腕を引っ張ってドアから離れた。

彼の不審そうな声にも構わず、広い背中をぐいぐいと押しやって階段のところまで誘導する。

「ここはわたしがやっておきます！ 剣崎さんは先に下降りててください！」

「え、でも——」

「わたしもすぐ行きますから！ 荷物ありがとうございました！」

「あ、え……うん、ど、どういたしまして……」

流れに流され、剣崎は不思議そうな顔をしながらも、結局そのまま階段を大人しく降りていった。

一階のリビングの方へと行き、完全に姿が見えなくなってから、さくらはホッと胸を撫で下ろす。

それを見計らったように、ポケットに入っていたケルベロスがひよこりと頭を出した。

「あー、びっくりした……」

「それはわたしの台詞だよ、ケロちゃん……」

軽く首根っこを掴むようにして、ケルベロスの体を引っ張り出しながら言う。ケルベロスはその手を抜け出しながら、自分の羽根をばたばたと動かしてさくらの目の前に浮き上がった。

「まあ、あのにーちゃんを下に追いやってくれたんは賢明やったな。そうでもせえへんかったら、下手するとずーっとポケットの中やったかもしれないし」

ケルベロスが下に聞こえない程度の声でぼそぼそ話しかける横で、さくらは手にしていた荷物を廊下の隅へと置いてから、先ほど剣崎が入ろうとした部屋のドアを開いた。

そして、二階に上がって最初にしたのと同じように、カーテンと窓を開け放っていく。

「うん……。とりあえず、誰も来ないうちは二階で好きにしていけど、見つかりそうになったら、さっきのわたしの荷物の中に隠れるようにしててね」

「おう。——それにしても、さくら……。一体何考えてんのや？ さっきの話やと、あのにーちゃん泊まらせようとしたの、さくらっちゃんことになるやないか」

「そ、そうだけど……」

話をしつつも、隣の部屋へと移動して、また同じ作業を繰り返すさくら。ふよふよと飛びながらケルベロスはそれについていき、言葉を続ける。

「まあ、思ったほどガラ悪い感じがしないのはええとして、どこの馬の骨とも分からんような奴を引き止めるって、普通はせえへんで」

「剣崎さんはそんな人じゃないよ。——たぶん」

「たぶん、って。なんやその微妙な自信は」

さくらの返答に、ケルベロスが即座にツツコミを入れる。

すると、開けたカーテンを窓の横にまとめようとしていたさくらの手が止まり、窓ガラス越しにどこか遠くを見つめるように視線を投げかけた。

その横顔を見たケルベロスは何かを感じ取って、輪郭の単純すぎる顔に、険しい色を滲ませる。

「……なんか、気になることでもあるんか？」

静かに問いただと、さくらは少し躊躇うように間を置いてから、小さく頷いた。

「昼間、車でここまで来るときに夢を見て……」

「どんな夢や？」

畳み掛けるように問うケルベロス。さくらの夢の内容がどれだけ重要なのかを、彼は身をもって知っている。

さくらは止めていた手を再び動かして窓を開けながら、口を開く。

「男の人が二人出てくるんだ。森みたいな所にいて、どっちもすごい怪我してて。」

何か話してただけで、何言ってるかまでは分かんなかった。――

それでね、」

部屋からまた廊下に出て、今度は足が止まった。

すぐ傍らから、一階に繋がった階段を見やる。下からは、桃矢と、藤隆と――剣崎の声が漏れ聞こえた。

「……その、夢に出てきた男の人の一人が――剣崎さん……だと思
うの」

耳元で、ケルベロスが息を呑む音がした。

――似ている、と最初に感じたときは、すぐに気のせいだと思い直した。いくら自分の夢が特別だからといって、一晩もしないうちにその夢の登場人物と鉢合わせるなんて、あまりにもできすぎだと。しかし直後に、あの髭面の男の空き巢末遂を見逃してほしい、と自分達に頼み込んだときに見せた真っ直ぐな眼差しと、夢の中でもう一人の青年に何かを宣言する、強い意志を宿した目が。

自分も出発すると言って、それを心配した藤隆に「何があっても平

「気だ」と答えたときに浮かんだ笑みと、夢の中で背を向けながら見せた、穏やかで優しい微笑みが。

あまりにも、似ていた。——いや、そのものだった。

だからさくらは、ほとんど確信するしかなかったのだ。剣崎こそが、あの夢の登場人物であると。

そして同時に思った。あの夢は、剣崎と出会うために見たものなのかもしれない、と。

「……それだけの理由で、引き止めたんか？」

なかば啞然としたような声音で、ケルベロスがぼやく。だが、

「それだけじゃないよ」

と、さくらは否定した。階下から視線を外し、最後の部屋に足を踏み入れる。

「わたしの思い過ごしかもしれないけど……剣崎さんね、よく笑いかけてくれるんだけど、目が笑ってないの」

「——そんなにこわい目付きしとんのかいな。けったいなやつぢゃなあ」

「うつん、そういう意味じゃなくて」

最後の部屋はカーテンではなく、ブラインドだった。コテージの持ち主である講師の私室なのか、部屋の雰囲気もなんとなく書斎じみている気がする。

開け方に若干戸惑ったものの、すぐに窓の端から垂れ下がる紐を見つけて、適当に引っ張りながらブラインドを上に取り開けていった。

「目が笑ってないっていうのは、こわいんじゃないかって……さびしうなの」

サッシの鍵を外し、からりと窓を開ける。吹き込んだ夏風が頬を撫でた。

「なんだか……すごく大事なものをどこかに置いてきちゃって、取り

に行きたいんだけど、行けなくて、もどかしくて……心細くて。そんな目をしてる気がするの」

遠くを見つめながら、さくらはそう呟き、ケルベロスは神妙な顔でそれを眺めた。

——さくらの言葉は、はつきり言って要領を得ていない。

しかし、長年共にいた経験則として、さくらが直感的に察知した事柄はたいてい間違っていない、というものがある。

臨時で赴任した教師の観月歌帆も、正体を隠して転入してきた柊沢エリオルも、疑惑があったり、警戒されたりしていたにもかかわらず、さくらは「悪い人」とは認識していなかった。そしてその認識が、結果的には正しかったことも証明されている。

さくらが、剣崎なる青年の目を「さびしそう」と感じたのならば、それは勘違いとも言い切れないかもしれない。

「……で、そのにーちゃんが『さびしそう』なのが、さくらは放っておけなくなっただけのことやな」

さくらの肩へちゃっかりと座り込みながら、ケルベロスがそう結論付ける。

答えはなかったが、その無言こそが肯定を示していた。

「さくららしいというか、なんというか……。まあ、さっき話したときも、あのにーちゃんから特に変な力の気配とかもせえへんかったし……夢の方も気にはなるけど、いっしょに泊まるくらいなら別にええんじゃないか？ 『旅は道連れ』とも言っしな」

「……………うん」

ようやく納得してくれたのか、励ますように言葉をかけるケルベロスに頷き返しつつ、さくらは網戸を閉めて部屋を後にした。

その時、

「さくらー！ 夕飯にするから早く来いよ」

と、階下から桃矢が呼ぶ声がして、さくらは「はい！」と返事をする。

「それじゃ、気は進まんけど、わいはここでおとなしくしとるわ……」

代わりに、わいの分のデザートもよろしく」

「う、うん、分かった……」

びしっ、と指（というより腕）を突きつけて、ぬかりなく言うことだけは言い置くケルベロスに、さくらは若干呆氣にとられつつも引き受ける。

そして、肩からケルベロスが離れたのを確かめてから、階段を下りて行った。一階に入つてすぐ、食卓用のテーブルを念入りにごしごしと拭く長身の背中と鉢合わせる。――剣崎だった。

「……あ。ごめん、ここ座る？」

さくらに気付いた剣崎が、体を避けながら、傍らにあつた椅子を引いて促す。

「だいじょうぶです。わたしも何か手伝いますか？」

「ん？ え、えーっと……」

「おい、その怪獣。ヒマだったら、横の棚からコップ出してこっち持つて来い」

逆に聞き返されて返答に詰まった剣崎を遮り、台所で食器を洗っている桃矢が平然と言つてのけた。

さくらは思いつきり眉をひそめて「だれが怪獣ですって!？」と反抗しながらも、言われた通りにコップを取り出す。

台所の奥では、エプロン着用済みの藤隆が微笑みながら、家から持ち込んだ食材のパスタを茹でていた。

奇妙な一日の、平穏な夕暮れのことだった。

？・情 SYMPATHY (後書き)

前回に比べてポリウムが大幅アップしました。今までは5,000字前後だったんですが、今回は一気に8,000字超……あれこれ。

一応文字数には気を付けつつ執筆しておりますが、基本的には「切りたい所で切る」で進めています。ただし、最大でも1万字未満。それ以上いく場合はなんとかして分割するという方針です。

サブタイについて。漢字の「情」と英語の sympathy、厳密に意味は一致しておりません。強いて言うなら、エピソードの内容に合わせて意識を施しています。

sympathy は人への思いやり、共鳴・共感という意味。さくらたちと剣崎の間を行き交う思いやり、同時にさくらが剣崎の秘めている感情に気付いているというような解釈をお願いします。

しかし、剣崎の口調が難儀です……。どっかのイマジンズと違って口癖があるわけでもなし、喋り方に特徴があるわけでもなし、いたって普通の話し方。適度に若者っぽさは出しつつも、あんまり汚い言葉遣いはさせない、というふうに意識はしています。でも漫画作品と勝手が違うので、「らしさ」を出すのは結構大変です。

最終手段はオンドウル語なんですが……当時、中の人嫌がってたというし、揶揄であることには変わりないので、あからさまに使うのはナシと誓っています。すでに驚きの声を「え!？」ではなく「うえ!？」と書きちゃったりしてますが……許容範囲だよね……？

ところで活動報告にも書きましたが、ようやくブレイドの劇場版作品『MISSING ACE』を視聴しました。やっぱり動画サイトですが。ちなみにディレクターズカットで。

もうあれは……ほんとに、切ない。出番少なかったけど、始さんの

存在感が色んな意味で重すぎた。冒頭でもラストバトルでもずぶ濡れでばろぼろな剣崎を慰めたい。劇場版は始さんの笑顔が、テレビ最終回は剣崎の笑顔が映えていたと思う。

さらに追記。

おかげさまで、当作品が気に入って登録数2桁台に突入。読者の皆様に心から感謝を申し上げます。

今後どうぞよろしくお願いいたします。

追記：2 / 5挿絵を追加

？・朝 DAWN

足の下で冷たい海面がうねり、飛沫を上げる。

耳元で潮風がごうごうと唸り、遠くでカモメの甲高い鳴き声が聞こえる。

切り立った岸壁の上で、パジャマ姿のさくらは、裸足で静かに待っていた。

何を待っているのか、さくら自身にも分からない。

それでも、待っていたのだ。

“何か”を“見届ける”瞬間を、ただ、ひたすらに。

やがて、その時がやって来た。

すぐそばの林から、誰かが駆け出してくる。

明るい茶の長髪、所々穴や裂け目のできている暗色のジャケットとジーンズ。

急に立ち止まった勢いで、胸に光る剣のペンダントトップが揺れた。

『—— 剣崎、さん……？ 』

見知った顔——と言っても、知ってからまだ一日もしていないが——に、さくらは思わず呟いた。

しかしその声は、野外であるにもかかわらず、まるで浴室内で発せられたかのように不自然な反響を残しながら、波音の中に消えていく。

林から飛び出した彼——剣崎は、さくらの方を見向きもせず、浅い呼吸を繰り返しながら背後をちらりと見やる。

しかし、すぐに何かを振り切るように前へ向き直り、ゆつくりと、崖の淵のほうへ足を進めた。

ジャケットの裾が潮風に煽られてばたばたと暴れ、左胸にプリントされたモノクロのロゴが布地と共に波打った。

あと一步踏み出せば転落する。

そんな位置まで来た剣崎は、茶髪をなびかせながら、のろのろと視線を持ち上げた。

さくらもつられたように、視線を上へと向ける。

空が、青かった。

雲ひとつない、抜けるような青い空。

それがどこまでも、延々と、広がっている。

さくらはほどなくして青空から視線を外したが、剣崎はその空を、細めた目で、ただじっと見つめていた。

嬉しそうな、悔しそうな、幸せそうな、泣きそうな、そんな目で。

さくらは、ああ同じだ、と思った。

「何があっても平気だ」と、そう言い切りながら見せた、あの目と。口元の笑みとは反対に浮かび上がっていた、あの哀しい色と。

剣崎はそのまま、静かに目を閉じ、口を開いた。

「俺は　と　う。

そして、　みせる」

そう、言った。

自分自身に、固く言い聞かせるように。

同時に、誰かに強く訴えかけるように。

声は耳に届いた――所々が途切れてはいたが。

しかし、口の動きで分かった。
その言葉が、前の時、あのベージュのコートを着た青年に向かって告げたのと同じものであると。

剣崎は目を閉じたまま顔を下ろし、ゆっくりと目蓋を開く。
その目からは、すでにあの哀しい色は残らず消え失せていた。
あるのは、揺るぎない決意の光だけ――

それは、一瞬のことだった。

剣崎はおもむろに地を蹴り、正面目がけて跳び上がった。
しかし、その先に地面は続いていない。何もない空間へ飛び込んだ
剣崎の長身は、重力に従い、崖下の海面へと真っ逆さまに落ちていく。
く。

荒れる波の中へと、吸い込まれていく。

『 剣崎さん ――― …… !! 』

さくらはその光景に、ただ必死で叫んでいた。

……
……
……

がば！と、タオルケットを跳ね除けるように飛び起きる。

開けた視界は薄暗く、青い空も、波音の唸る海も、崖もそこにはない。無論、剣崎の姿も。

目に映るのは、白い壁と、マットレスだけがのつかった空のベッドだけだ。

さくらは、激しく鼓動を打つ胸を軽くて手で押さえて、はあっ…と大きく息を吐いた。

「――夢、か……」

安堵したものの、すぐにじわじわと疑問や不安が脳裏へ湧き始める。

――どうして、剣崎さんが…？

夢の内容は、わざわざ思い起こさなくても覚えている。というより、簡単に忘れられるはずがない。

――剣崎は、林から出て来ていた。車での移動中に見たものと、今見た内容が一貫しているのなら、今見た夢は前に見たものの続きと考えるのが自然だろう。

つまり、コートの青年に背を向けた剣崎は、そのまま林を抜け出し、そして――

――そんなこと、あるわけない…

夏にもかかわらず、さくらの背筋へ嫌な寒気が巡っていく。

あるわけがないのだ、そんなこと、あるわけが。

あの夢が正しいとすれば、剣崎は崖から飛び降りて、一度海に沈んだということだ。そんなことをして、無事でいられる人間などいるはずがない。下手をすれば命すらも落としていたかもしれない。

しかし現実には、剣崎はさくら達の目の前に現れた。……海に落ちたが、幸運にも軽症で済んだ？

そんなはずはない。あの崖は軽症で済むような高さじゃなかった。

だがさくらはすでに見てしまっているのだ。昨日、大量の荷物をものともせずさっさと運んでいく剣崎の姿を。あれが、崖から落ちて海面に叩き付けられた経験のある人間の成せる業とは思えない。そんなことをしたら、ダメージを受けたはずの体の方が悲鳴を上げるに決まっている。

だとすれば、あれは“かつてあったこと”を映し出す過去夢ではなく、“これから起こること”を伝える予知夢ということなのだろうか――

脳裏でぐるぐると思考回路を働かせるさくらだったが、やがて、払い捨てるようにかぶりを振った。

――やめよう……あんまり一人で考えすぎるのもよくないし……

そんなふうに思いながら、ふと枕元へ目をやる。

そこには、まるで冬場の猫のように体を丸めたケルベロスが、穏やかな寝息を立てて熟睡していた。

昨晚、さくらが下の階からこっそりと持ってきたカップゼリーを平らげたケルベロスは、ほどなくして寝入ってしまった。おそらく、昼間にバスケットの中で車に揺られた疲れが襲ったのだろう。夢のことなどについて色々と話したいという思いはあったが、起こすのも忍びないので、さくらもあえて寝かせてやっていた。

時折寝返りを打ちながら、何やらむにやむにやと呟いているが、目を覚ます気配はない。

さくらは静かに苦笑してから、パジャマのままベッドを抜け出す。コテージに置いてあったスリッパを裸足に履かせると、部屋の中にあった机へと歩み寄った。

机の足元には荷物が置いてある。その黒い天板には、中学生には不似合いな、古めかしい装丁があしらわれた一冊の分厚い本。

さくらは指先で、本の表紙へ軽く触れた。

ハードカバーの表面には、何かを封じ込めるように両端から鎖を生

やした太陽の絵が載っている。しかし表紙には他に何も描かれておらず、不自然な空白だけが際立っていた。

さくらは無言で表紙を開く。すると、そこには文字の並んだページが現れる——と思われた。

だが、実際に表紙の下に隠されていたのは、本を象るように貼り固められた白いページの束で、一枚一枚をめくりながら読み取れる文章などではない。ページの束は真ん中が細長くくりぬかれており、その窪みと同じサイズのカードが納められている。

その背面に描かれた魔法陣をぼんやりと眺めていると、不意にそのカードが淡い光を発し、見えない糸で操られるように本の中から抜け出した。

「……あ」

小さく声を上げる間に、するすると宙へ引き上げられたカードたちは、さくらの周りに散らばって夜光虫のように何度も光を放つ。

その様子が、まるで氣遣ってくれているかのようで、さくらは思わず微笑んだ。

「——ありがとう。わたしは大丈夫だから」

宥めるように声をかけて手の平を差し出せば、浮遊していたカードたちは、示し合わせたようにその手へ重なっていく。

——『さくらカード』。

かつて、魔術師クロウ・リードが創った『クロウカード』を、新たな主となったさくらが自身の魔力を込めて創り変えたカード。

水や火、風などの名前に応じた魔力が封じられ、それらは各々に姿と意志を持っている。

そしてそれを納める本の表紙にはケルベロスが、裏表紙には月が守護者として眠っていた。

しかし「主」といつても、さくらはそのような関係をあまり重くは見えない。むしろケルベロスと同じく、カードたちにも対等で——「なかよし」でいられればそれでいいという程度に捉えている。

そんなさくらのことをカードたちも認めてくれているようで、たまに落ち込んだりしていると今のうちに心配したり、慰めようとしてくれていた。

さくらは、手の上で静かになったカードたちをいとおしむように軽く撫ぜた後、再び本の中へと納め、表紙を閉じる。

昨日、電池を入れ直して時刻を合わせた壁掛け時計を見上げてみると、ようやく朝の六時半に差し掛かった頃だった。

早起きしすぎちゃったかな、と思ったその時、さくらはあることに気付いた。

「…ほえ？」

不審な声を漏らして、背後にある部屋のドアを振り返る。

眠ったケルベロスを刺激しないよう足音を抑えながらドアに寄って、少しだけ開けてみた。すると、僅かに開いた隙間から、何やら香ばしい匂いが入り込んでくる。

さくらはさらにドアを開け、部屋から顔だけを出して様子を窺った。二階にある他のドアは物言わず、ぴたりと閉じられたままだ。そのうち二つの部屋には、桃矢と藤隆がそれぞれで眠っているはずだが、すでに起き出しているような気配は感じられない。

しかし、わずかに見える階段の下…一階の方からは、匂いと共に何やら忙しそうな物音が聞こえる。

さくら自身やケルベロスは無論のこと、桃矢も藤隆も違うとなれば、考えられる者は一人だけだった。

その答えにたどり着いたさくらは、一瞬だけ眉をひそめた後、ドアを閉め直して横のクローゼットから着替えを引っ張り出した。

じゅうつ、と何かが焼けるような音。かちゃかちゃ、と何かをかき混ぜるような音。

さらに換気扇が回る低い音、食器の音。

狭い台所には、香ばしい匂いが充満しており、その中を細い長身が忙しく動き回る。

「……わ、わっ！ やべ、焦げる！」

慌てた声を上げながら、コンロの火を止めてフライパンを下ろす。うつすらと焼き目のついたベーコンが平らな鉄板に仲良く並んでいるのを菜箸で拾い上げ、シンクに用意した皿に盛り付けていった。

「よーし。あとは卵を……」

「——何してるんですか？」

唐突に、リビングの方から投げかけられた声に、台所の剣崎は「うえッ！？」と妙な声を上げ、持っていたフライパンを取り落としかけた。

辛うじて取っ手を持ち直してから視線を向けると、シンプルなシヤツにチエックのスカートを身に着けたさくらが、不思議そうな顔で立っていた。

「あ……お。おはよう……」

「えっと、おはようございます……」

とりあえず、といった雰囲気で、二人共に軽く挨拶をする。そして改めて、

「……あの、剣崎さん、何やってるんですか……？」

とさくらがおそるおそる尋ねた。

「あ、あははは……いやーあのー……ちょっと台所、借りてるんだけども」

剣崎は寝癖の残った茶髪を掻いてごまかすような笑いを浮かべながら、歯切れの悪い答えを寄越す。

台所からのそのそと出てきた彼は、昨日桃矢が仏頂面で貸してくれた黒いポロシヤツに、紺色のジャージのズボンを穿いていた。しかし、やはり背丈の差なのか、ズボンの方が若干寸足らずなのが見て取れる。ちなみに、ここへ訪れたときに着ていたトレーナーとジー

ンズの方は、藤隆の厚意で洗濯に回されていた。

「すごい早起きですね…。やっぱり、ソファだと寝苦しかったんですか？」

「そんなことないさ。むしろ今朝はよく眠れたほうだったし……早起きなのは君だって同じだろ？」

さくらが驚いたように呟くと、カウンターに寄りかかった剣崎は顎をしゃくってそう言った。

リビングに鎮座する三人掛けの長いソファの端には、元々あったクッションに加えて、薄手のタオルケットが綺麗に畳んで置いてある。剣崎がここで寝るのに使っていた物だ。背もたれには、彼が腰に巻いていた暗色のジャケットが掛けられていた。

昨晚、夕食をとりながら部屋割りを決める際、二階の部屋の一つを桃矢と剣崎で共有しようという提案に及ぶと、剣崎は自ら「ソファの上で構わないから、一階で寝させてほしい」と申し出た。それだと寝づらいたろうとも言われたのだが、あまり整ったベッドよりも急ごしらえ的な寝床の方がかえって落ち着く、というのが彼の言葉だった。

一体今までどんな生活をしてきたのか、と不審すら抱きかねない主張だったが、剣崎に譲る気が無いのを悟った藤隆は、仕方なくその要望を呑んだのである。

「けど、どうして台所に？ ……あ、お腹すいちゃったとか」

「や、そういうんじゃないわ。その………本当は、こっそりやるつもりだったんだけど……」

参ったな、などとばやいて再び歯切れが悪くなる剣崎。

さくらが小首を傾げている目の前で、彼は躊躇うように視線を泳がせてから、口を開いた。

「——えつと、君と、あとお父さんと兄さんに……朝食、用意してやりたいな——って」

「……………えつ？」

「だから……ここに置いてくれる礼にさ。大した物作れないけど、

何か…できることをしたいと思って」

きょんとしているさくらに、剣崎は照れくさそうな口調で言った。
「寝る場所貸してもらえる、バイクのメンテも手伝ってくれる。おまけに昨日なんか、迷惑かけて、結構無理な頼みもしたのに聞いてもらえたし。」

ここにいる以上は、俺も色々やれることはしたいけど、やっぱりどうしても釣り合わない気がして……他にできることっていったら、これぐらいかなーって思ったんだ。俺、元々長いこと一人暮らししていて、料理はそれなりに自信があるから。ここの食材、勝手に使ってるけどね」

「そう、だったんですか…」

「それで、皆起きてくる前にできあがった朝食を並べておいて、びつくりさせるつもりだったんだよ。ちよつと予定が狂っちゃったな

……」

軽く溜息を吐き、カウンターに置いていたトマト——藤隆が家から持ってきた物だ——を手に取って弄ぶ。

さくらはそんな剣崎の傍へ歩み寄り、頭二つ分ほど上の位置にある、彼の少し残念そうな表情を見上げた。

「……すみません、剣崎さん」

「——へっ？」

「なんか、ここに来てもらってからずっと、剣崎さんに気を遣わせちゃってるみたいだから……。すぐく遠慮してるし、ご飯まで作らせちゃったりしてるし……かえってわたしの方が迷惑かけちゃってますよね。だから…本当にすみません」

そう告げて、表情を翳らせたさくらに、剣崎はうろたえた。

自身はよかれと思ってしていたことが、どうやら裏目に出てしまったらしいと分かると、ひとまず持っていたトマトをカウンターに置き直す。少しの間躊躇ってから、さくらの前に屈んで視線を合わせた。

「あの…俺、そんなつもりじゃなかったんだ」

探るように言葉を選びつつ、片手をさくらの肩に乗せる。

「俺……昔っから不器用で。人に親切にしてもらったり、仲良くなつて、それに応えようとするといつとも空回りしちゃってさ……。今日もホントに、困らせるつもりはなかったんだよ。でも、そんなふうに悪い気にさせちゃったのなら、ごめん……。これからは気を付けるようにするから」

宥めるように、声をかける。

さくらが視線を上げると、そこには困惑しながらも笑顔を向けようとする剣崎の顔。「不器用だ」と告げているその台詞すら不器用で、頑張つて笑みを浮かべてはいるが、眉尻が完全に下がって八の字になったその表情も不器用だ。

それを目にしたさくらは、思わず釣られたように笑ってしまう。

「じゃあ……剣崎さん」

そつと呼びかければ、剣崎は「ん？」と僅かに首を傾げながら、さくらの言葉を待ってくれた。

「その朝ごはん作り、わたしにも手伝わせてください」
につこり。

そんな表現を忠実に絵に描いたかのような笑顔を見せたさくらに、

「……え」と剣崎が呆然とした声を上げる。

「……イヤ、でも」

「わたしやお父さんやお兄ちゃんに、ごはん作ろうって思ってくれたのは、その気持ちだけでほんとにうれしいです。でも、やっぱり一人だけで全部作らせるなんて申し訳ないし……だから、お手伝いだけでもさせてください」

はつきりと、剣崎の顔を真っ直ぐに見つめて言い切るさくら。

剣崎はそれでも何か言おうとして口を開閉させたが、説得できるような言葉が浮かばなかったらしく、諦めて溜息を吐いた。

「……分かったよ」

観念したような返事に、さくらはくすりと声を漏らす。

剣崎もふつと笑い返しながら立ち上がり、出たばかりの台所へ再び

足を進めていく。さくらはその後についていった。
その広い背中を見上げたとき、今朝の夢の光景がさくらの脳裏を過
る。

——崖から海へと落ちていく、剣崎の姿が。
しかし、さくらは頭を小さく振って、その光景を思考から取り払っ
た。

——とにかく今は、剣崎さんを信じたい。

ただ、そんな一心で。

更新遅くなり申し訳ありませんでした。年明けが締め切りの論文の追い込みに入りますので、作品投稿の他、感想返信も大幅なペースダウンが予想されます。どうかご容赦ください。

それはさておき、掲載分の内容について。

—— 単調すぎる。やべえ、早くもスランプ…？なにこの全く進歩のないつまらん話は。自分でも何書きたかったのか分からなくなりそう。

とりあえず『さくらカード』たちとさくらの交流と、張り切りすぎちゃう剣崎を書きたかった。あとさくらと剣崎をちよつと二人きりにさせてみたかった…てなところでしょうか。次はもつと楽しいシーンを入れたいと思います。

余談。剣崎が首から掛けているアクセサリを「ネックレス」と書いてきましたが、自分で違和感を感じたので「ペンダント」に修正しました。

調べたところ、同じ首に着けるタイプでも、鎖そのものがアクセサリだと「ネックレス」、トップがぶら下がってそちらがメインだと「ペンダント」と言うらしい。ならば剣崎が着けているのはネックレスというよりペンダントだろう、と見なしてのささやかな訂正でした。言葉の定義って難しいな！。

とはいえ、明日（というより今日）から『W&Dイケイド』公開ですね。私も気分転換に見に行きます。

剣崎が声出演することですが——正直、あんまり期待はしてません。だって『Dイケイド』最終編に、一生分を使い果たす勢いで注ぎ込んだ私のわくわくどきを破壊してくれた東映だもの…（遠い目）。

でもいいよ、何があっても許す。作品を愛するってそういうことだ
と思うから。

？・秘 AFFECTION

白くつややかな円を描いた食器の真ん中に、アーモンドのような、あるいは三日月のような細長い形をした黄色い塊が、ベーコンと、楕形に切られたトマトと、ちぎりレタスと共に横たわっている。

僅かに茶色の焼き目がつき、表面に赤いケチャップが綴られたその黄色い塊に、銀色のスプーンの円いふちが入り込み、端の方からすくい上げる。

スプーンにのった、軟らかな黄色はそのまま持ち上げられて、口の中へと運ばれた。そして、

「——おいしいっ！」

と、さくらが満面の笑みを浮かべ。

「うん。すごくおいしいです」

と、藤隆が軽く頷きながら目を細め。

「……まずかねえけど、塩胡椒が少し強くないか？」

と、桃矢が仏頂面で眉をひそめた。

「す、すいません、味付けとか全部自己流でやっただけですけど……」
食卓を囲みながら、黄色のオムレツを食べてそれぞれに感想を述べた三人——というより、一人だけ苦言を呈した桃矢に対して、剣崎は恐縮したように答えた。

その様子を見たさくらは、なんだかんだ言いつつも黙々とオムレツを食べる桃矢のことをやや厳しい目つきで睨む。

「お兄ちゃん。剣崎さんががんばって作ってくれたのに、そういう態度ってないでしょ」

「……おれは思ったことを正直に言っただけだ」

「でも言い方ってものがあるじゃない！」

「朝からそんなに怒鳴るなよ。別に『うまくないから食えない』とは言ってねえだろ」

「『まずくない』っていうのもどうかと思うけど。素直に『おいしい』って言ってあげればいいのに！」

「なんでお前がそんなに怒るんだ。お前はせいぜいトマトとレタス盛り付けたくらいしかやってないだろ」

「そ、そうだけど！でも剣崎さんにちょっとくらい感謝したらどうなの！？」

「ありがたいとは思ってるって。——にしても朝から元気だな、うちの怪獣は。珍しく早起きだったし、今日は槍でも降って……ああ、怪獣が引き起こすなら地震か。どっちにしても大変な一日になりそうだ。まいったまいった」

「だれが怪獣ですってー！？」

投げかけられる文句を受け流しつつ、いけしゃあしゃあと「怪獣」呼ばわりをする桃矢に、ヒートアップしたさくらが声を荒げる。

脇で見ていた剣崎が、今にも噛みつきそうな勢いのさくらを、

「あ、あの、そんなにムキになんなくていいから。落ち着きなつて

……」

と慌てて宥めすかそうとした。

「そうですよ、さくらさん。それと桃矢君も。せつかくこんなにおいしいオムレツを作ってくれたんですから、ゆっくり味わって食べましょう。ね？」

そんな言葉で、にっこりと微笑みながら告げたのは藤隆だ。

纏う空気は極めて穏やかで物腰も柔らかいが、それがかえって彼の台詞に有無を言わせないものを含ませている。

曲がりなりにも一家の家長。食卓を挟んで一触即発にまでもつれ込みそうになった桃矢とさくらは、その言葉に「はい……」と頷き、大人しく食事モードに戻った。

一人外野に放り出されたようなポジションから眺めていた剣崎の口から「すげえ」といった呟きが漏れたが、声が小さかったので他に聞かれることはなかった。

「剣崎君もありがとう。わざわざ早起きまでして、食事の準備をし

てくれて。本当に助かります」

「えっ、い、いや。……たまたま目が覚めただけですから。どういたしまして」

「うん。——でもね剣崎君、色々とぼくたちを手伝おうってがんばってくれるのは嬉しいけど、そんなに気を遣わなくていいんですよ。一人旅をしていたのなら、それなりに苦労もしたでしょう？ わざわざ畏まったりしなくて構いませんから」

「けど……せつかくの家族旅行なのに、世話になるし、俺——」

「そのことは気にしなくて大丈夫。それに『家族旅行』だったらなおさら、遠慮しないで下さい。短い間ですけど、ここで一緒に過ごしてくれるのなら、君も家族の一員のようなものだから」

優しい口調で藤隆が言った直後、とにかく丁寧な態度に徹していた剣崎が、大きく目を見開いた。

オムレツと一緒に盛り付けられたベーコンにフォークを伸ばそうとしていたさくらは、そんな彼の様子にきょとんとする。

剣崎は半ば呆然としたように口をぱくつかせてから、ゆっくりと声を絞り出して「……俺が、家族……？」と繰り返した。

剣崎の反応を見た藤隆が不思議そうな顔をして、
「ええ。ぼくはそう思ってるんだけど……あれ、何か気に障っちゃったかな？」

と問い直した。

剣崎はそこで、戸惑ったように、躊躇うように、伏せた視線を泳がせる。

一瞬だけ唇を、ぎゅっ、と噛み締めたように見えた。

——その目が、どこか潤んでいるように感じられたのは、さくらの気のせいだろうか。

しかしそれもほんの僅かな間のことで、次の瞬間には剣崎は伏せた視線を再び上げて、子供のように屈託のない笑顔を浮かべていた。

「いえ！ 全っ然気に障ってなんかいいです！ ……そう言ってもらえて、俺も嬉しいですよ！」

勢い余って裏返りそんなテンションの声で、高らかに答えた。

藤隆はその答えに「それはよかった」と安心したように頷く。

桃矢は無関心を装っていたが、横目でちらりと剣崎を見て、かすかに口元が緩んでいるのが分かる。

そしてさくらは、まるで今までの遠慮を吹っ切るかのように自分もオムレツを食べ始める剣崎に、なぜかひどく安堵した。

——まだ、頭の中で焼き付いて離れないのだ。あの、笑顔とは裏腹の、寂しげな色を宿した眼差しが。

「そういえば父さん。ここを貸してくれた先生に連絡したのか？」

バイクのタイヤのスペア使ってもいいかって」

コーヒーに口を付けながら、思い出したように桃矢が尋ねた。

「うん、これを食べたら電話するつもりだよ。——そうだ。剣崎君、悪いけれど一つ頼まれてくれるかな？」

「……はい？」

藤隆の言葉に、オムレツと一緒に用意したトーストにかじり付きながら、剣崎が間拔けな声で反応する。

「この近くにね、旅行者向けのホームセンターがあったと思うんです。確か食材も一緒に売ってたかな……。後で地図とリストを渡すから、必要な物を買って来てもらえませんか？……結構な量になるかもしれないけれど」

「ああ……はい。分かりました」

「今、ここにある分だけじゃだめなの？」

藤隆が剣崎に託した頼みの内容に、さくらがそんな疑問を口にした。
「うん、あと五日間過ごすにはさすがに足りないかな……夏場で食べ物も傷むだろうし。ここの掃除も一応頼まれてますから、必要な物も買つてこないと。それに今夜は雨も降らないから、外でバーベキューにしようかと思ってるんですよ」

「えっ、ほんと？」

「ええ。だから、そのための食材や道具も揃えておかなきゃね」

「やったー！ 外でバーベキューなんて久しぶり！」

軽くウインクをして今日の予定を告げる藤隆に、さくらは諸手を挙げて喜んだ。

そこで「あっ」と、あることを思いつく。

「そうだ！ お父さん、わたしも剣崎さんといっしょに買い物行ってきた方がいい？」

そう提案すると、真っ先に剣崎が「へっ！？」と驚いた様子を見せた。

「——なんでお前がついて行くんだよ」

途端にしかめっ面を浮かべた桃矢が怪訝な声を上げた。

「いいでしょ、別に！ お手伝いしに行くだけだもん。荷物が多かったら、剣崎さん一人じゃ大変かもしれないし」

「そうですね……じゃあさくらさんもお願ひします。何かあったら、携帯電話で連絡するように」

「はい！」

「ということで、いいかな？ 剣崎君」

笑顔で確認をとる藤隆に、剣崎は自分の席へ用意していた牛乳のコップをばつと取り上げ、一気飲みした。

ごくごくとそれを飲み干し、空になったコップを食卓に勢いよく置くと、気合でも入れ直したかったのか「ふーっ」と深い息を吐いてから姿勢を正して、藤隆を真っ直ぐ見据えた。

「はいっ！ 俺にできることなら、なんでもやらせてくださいっ！」
張りのある声と、真摯な表情で、彼はそう答えた。

一見すると、なかなか頼もしい反応ではあるが——そんな剣崎の顔を見て、さくらが盛大に噴き出していた。

「ぷっ……あははははは！ け、剣崎さん、やだ、それ……ふっ、あははははははっ！」

「うえっ？」

堪えきれない、といった風情で腹を抱えて笑いこけるさくらに、剣崎は目をぱちくりさせる。

見ると、その向かいに座っていた桃矢も、声こそ上げていないもの

の、口元を押さえながら肩を震わせていた。

さらに伝染したのか、藤隆もくすくすと笑いを漏らし始める。

「え…？ えっ？ あ、あの、何か変なこと言いました…？」

一人だけ、笑いの原因が理解できない剣崎が戸惑ったように聞き返す。

すると、桃矢が必死に笑いを噛み殺しながら、剣崎の顔を指差して、
「あんた…牛乳。鼻の下で、ヒゲになってる…」

かろうじてそう告げた。

——牛乳、鼻の下、ヒゲ。

剣崎は単語を反芻し、少しの間を置いてから、「…あッ！？」と上唇の辺りへ手をやる。

そこには、一気飲みした牛乳のこびりついた跡が、剣崎の端正な顔に不似合いな白髭を生えさせていた。

即席の白髭は、剣崎が気合を込めて口にした真剣そのものの返事と雰囲気を見事にぶち壊してくれていたのだ。

剣崎は慌ててその髭をこしこしと手でこすり取ったが、すでに時遅く。

「ふふふふ、あはははははははっ！」

完全にツボに入ったらしいさくらが、笑いながら目尻に涙すら浮かべている。桃矢と藤隆も控え目ではあるが、やはりまだ笑っていた。明るい笑い声に包まれた食卓の風景に、剣崎は照れくさそうに首の後ろを掻いて、やはり笑った。

朝日が差し込む二階の部屋の窓の一つから、オレンジ色の小さな頭が外を覗いた。

窓からはコテージの玄関先の様子が見える。

その玄関から、お洒落なポシェットを肩からかけた少女と、ラフな格好の長身の青年が並んで外へ歩き出している。

「……まったく、せつかく出かけると思ったら、余計なおマケ付き

かいな。さくら一人やつたら、わいも一緒に行けたのに」

長い尻尾を退屈そうにふらふらと揺らしながら、オレンジ色の頭――ケルベロスがぼやいた。

少し前、朝食を終え一度部屋に戻ってきたさくらに起こされて、外出するが一緒に来るかと聞かれた。

最初は、ようやく自然の空気を満喫できると喜びかけたのだが、同伴者付きと分かると即座に断った。

昨日、長時間バスケットの中で耐えたというのに、この期に及んでまたもやこそしななければならないというのはごめんだった。それなら、缶詰状態でも部屋でのんびりしていたほうがまだいい。

それに、さくらにはついでにプリンも買ってきてほしいと頼んであるし、楽しみが一つもないわけではない。

「あれがさくらの夢に出てきたつちゅうにーちゃんか……。やっぱり魔力の気配はせえへんし、見た目も割と普通なんやけどなあ」

玄関の方から藤隆が見送ってくれているのだろつか、コテージの前の砂利道で立ち止まって、軽く手を振っているさくらの横の青年を見つめながら独り言を口にする。

さくらとの身長差がやたら広い以外は、本当にごく普通の好青年だ。相当に卓越した魔力の持ち主であれば、その気配を隠すことも可能だが、それでも完璧に、というわけにはいかない。これだけ近くにいれば、力の片鱗くらいは漏れてくるはずだ。しかし、今のところケルベロスのセンサーに引っかかるようなものは何もない。

「……まあ、厄介な奴やなければええけどな」

言いながら、ケルベロスは窓の傍に立ったまま、ふと背後を振り返る。

視線の先にあるのは、部屋に備えられていた勉強机。上には『さくらカード』を収める分厚い本が置かれている。

しかし今、その本は表紙だけが開かれたまま放置され、いつもカードたちが眠る細長い穴は空っぽになっていた。

出かける前、さくらは「何もないと思うけど、一応ね」と言いなが

らポシエットにカードを詰め込んでいたのだ。

その時に見せた、あの苦虫を噛み潰したような表情が、ケルベロスの脳裏を過る。

「さくらの、それなりに気にはしとるっちゅうことか……」

ぼつりと呟いて、視線を窓の外に戻し——ケルベロスは、ぎよつ、とした。

砂利道に佇んだ青年が、玄関の方でもなく、さくらの方でもなく、こちらを真っ直ぐに見上げていたのだ。

正面から視線がかち合った気がして、ケルベロスは考える前に窓辺をすみやかに離れ、外からは死角になるであろう壁際へと張り付いた。

いつも桃矢や藤隆やその他の部外者をやり過ごすときのように、息を殺し、とにかくじっと動きを止める。

そして、ある程度時間が経ってから、そろそろと壁から顔を覗かせた。

青年はすでにコテージに背を向けて、さくらと談笑しながら砂利道を下っていた。まるで、何事もなかったかのように。

「……き、気のせいかな」

窓の傍に戻りながら、はーっと深く息を吐くケルベロスの顔には、うつすらと冷や汗が浮かんでいた。

「剣崎さん、どうかしました？」

外に出てすぐ、砂利道の上で何かに気づいたように視線を固定させたまま足を止めた剣崎に、さくらが声をかける。

しかし剣崎は「…あ。何でもないよ」と答え、さくらの横に並んだ。陽の差し込む砂利道をざらざらと踏みしめて、緩やかな坂を下っていく。

「んー：やっぱり空気がおいしいー！」

木陰の続く中、浴びる夏風も汗ばんだ肌には涼しい。さくらはぐーっ、と両手を広げて伸びをすると、嬉しそうに言った。

都会とは違う、樹や土や水の匂いが溶け込んだ自然の空気が、肺から体の芯まで馴染んでいくのを感じる。

そんなさくらの片手首からは、桃矢が雪兎から借り受けたというデジカメがぶら下がっていた。出かける際、桃矢にとにかく「貸して！」と迫った結果に引き受けた代物だ。勿論、これを持ち出したのには理由がある。

頭の上で、チチチ、とさえずりが聞こえた。

「あつ、鳥さんだ！」

見上げた先の枝に止まった小鳥が、その足元から生えた木の実をついている。

都会ではあまり見かけられない、野鳥特有の色彩豊かな羽根の模様に、さくらは胸を躍らせた。

「かわいいー。写真撮らなきゃ！」

早速、紛失防止用のストラップを手首に引っ掛けたままデジカメのスイッチを入れて、レンズを頭上の枝へと向ける。

——しかし、さくら自身、実際こういった撮影機器の扱いは慣れていない。まず、どこを押したらピントが合うのか、それからフラッシュの有無はどうするかなどで手間取る。

「えつと…えーと…：…これかな？」

手近なボタンを適当に押したら、いきなりファインダー画面にズームがかかり、撮りたい対象の小鳥とは違う場所を拡大してしまっ慌てた。

さらに、設定されている撮影のモードが悪いのだろうか、映っている画面がやたら暗い。

そうこうしている内に、枝にいた小鳥は用事が済んだのか、あるいはさくらのことを警戒したのか、一瞥もくれずに枝を離れてしまった。

「ああー！　撮り損ねちゃった……」

咄嗟に目で追ったものの、そのまま姿を見失ってしまい、さくらはがつくりと肩を落とす。

張り切って借りてきたはいいが、扱いが分からないというのは致命的だった。「振り回したりして壊すなよ」と桃矢に茶化され、ムキになって反論しているうちに、使い方を聞くのをすっかり忘れていたのだ。すると、

「——ちよつと貸してもらっていいか？」

脇で見ていた剣崎が手を差し出す。見上げてみると、彼の口元には自信に満ちた笑みが浮かんでいた。

さくらは少し逡巡したが、ストラップを手首から外してデジカメを手渡す。

剣崎は何やらカメラをちよこちよこと操作した後、辺りを軽く見回した。そして、道の脇で花を揺らしながら翅を休める色鮮やかな蝶に目を留めると、刺激しないようそつと近寄る。

長い足を折って屈み込み、蝶から適度な距離をとったままカメラを構えた。さくらはそんな剣崎の様子を静かに見つめる。

剣崎はさらにカメラを操作すると、上部にあるシャッターボタンへ、おもむろに指を添えた。

——ぴっ、かしやつ。

電子音が響くと同時に、驚いた蝶が、ぱつ、と花から飛び立つ。

しかし、剣崎は満足そうな様子でファインダーを確かめると、デジカメをさくらに手渡して見せた。

「どうかな？」

伺うように聞かれ、さくらは受け取ったカメラのファインダーへ目を落とす。そこには、綺麗な翅の模様と瑞々しい花の色が見事なアングルで収まっていた。

「わあ……！　剣崎さんすごい！」

「ははは。……それほど」

素直に喜ぶさくらに、剣崎ははにかんだような笑みを見せながら立

ち上がる。

「これさ、多分、今設定してあるモードなら大抵どこでも撮れると思うんだ。あとフラッシュ入れたり切ったりするの、ここな。ズーム調整するのはこっち。でもあんまりズームかけないほうがいいぞ、その分手ブレとかひどくなるから」

さくらの手元でボタンやその他の機能をざっと剣崎が説明する。少しいじっただけでここまで使いこなす、というのはなかなかのものだ。

「剣崎さん、写真とかよく撮ったりするんですか？」

何気なく尋ねると剣崎は「……ん？ああ……いや」と、急に戸惑ったような様子を見せた。

「俺じゃなくて、知ってる奴がよくカメラ使ってた。一度、こういうの使い方のコツとか教えてもらった。本人はすげー嫌がってたけど」

「……いやがってたんですか？」

「うん……そいつ、気難しくてさ。今思うと、ちょっかい出されるのが癪に障ってたのかなーなんて」

傷つくよなあ、などとぼやきながら歩を進める剣崎の目は、すでに遠くへ向けられている。

——やはりその目には、あの寂しい色が滲んでいた。

「……その人とは、今も会ったりするんですか？」

思わず聞いてしまったから後悔する。あんな目をしながら思い出すような相手なのだ、分かっただけで深入りするのは不謹慎というものだろう。

そんなさくらの心中を知らない剣崎は、ぴくりと表情を引きつらせたが、

「……いや。最近……ちょっとな」

はぐらかすようにそう答え、苦笑いをする。視線が分かりやすく宙を泳いでいた。

これ以上質問するのはいけない。そう思ったさくらは口を噤み、剣

崎もそのまま黙り込む。

——沈黙が二人の間に漂い、足元の砂利を踏む音だけがしばらくの間、続いた。

だが、

「……なあ」

あまりの静けさに堪えられなくなったのか、今度は剣崎から口を開く。さくらは顔を上げて、横の剣崎を見る。

「さつき、出かける時に気づいたんだけど……リビングに写真飾ってあったよな？ 女の人の」

「あ……ええ、はい」

剣崎の問いに、さくらは藤隆が家から持ってきた写真立てのことを思い起こす。洒落たデザインの写真立ては、いつも遠出をする時などに中身とセットで荷物に詰め込むのが木之本家の習慣となっていた。

「それと、玄関から出る前に『行ってきます』って言ってなかったか？ その写真に」

「はい、言っていました」

続けて聞かれて、さくらは頷く。そこで、そうか、と思い当たった。剣崎はまだ、さくらの家族について知らないことが一つだけあった。

「あの写真、わたしのお母さんなんです。昔、モデルをやってて、お父さんがいつもその写真を飾ってくれて」

「そうなのか」

「はい。撫子さんなでこっていつて、わたしの名前を『さくら』って付けてくれたのもお母さんなんです」

「へえー。いい名前付けてくれたな」

自然な口調で、剣崎からそう相槌が返ってきて、さくらは思わず口元が綻んだ。

「わたしが三歳のときに亡くなっちゃったんですけど……でも、お父さんからよく話とか聞かせてもらえるし。いつも挨拶だけはするようにしてるんです」

「……………」

暗くはならないように努めつつ告白したが、案の定、剣崎は言葉を詰まらせた。あるいは、写真が飾られていたという時点ですでに勘付いていたのかもしれない。それでも確かめずにはいらなかったのだろう。

「…………ごめん。悪いこと聞いた」

少しの間口を閉ざしてから、ぼつりと呟かれて、さくらはぶんぶんとう首を横に振った。

「そんなことないですよ！ 気にするのは当たり前だし…………それに、お兄ちゃんやお父さんもいるし、さびしくはないんです！ 本当に」そうフォローはしたが、見上げた剣崎の表情は翳っている。

しかしその翳りは、単に「辛い事情を蒸し返した」という罪悪感によるものにしては、少し色濃い気がして、さくらは眉根を寄せた。

やがて、剣崎はジャージのポケットに両手をつ込みながら、小さく溜息を吐いた。

「今朝…………俺の料理食べてもらった時。君の父さんに『俺も家族の一員みたいなもの』って言われて、本当に嬉しかった」しみじみと、語り出す。

「俺…………子供の頃に、親二人とも亡くしちゃってさ」

剣崎が口にした事实に、さくらは目を瞠った。

「えっ…………？」

「火事に遭ったんだ。家も、そこにあつた物もみんな燃えて…………幸い、引き取ってくれる当てがあつたから良かったけど、それでも家族連れとかを見かけると、なんかこう…………やっぱり、思い出しちゃつて。写真も燃えちゃったからさ、家族のいる写真っていいなーとか思ったこともあつた」

さくらは視線を正面へと戻した。

「…そう、なんですか」

「ああ…………や、あの、ごめん、変な話して。だから、っていうのもおかしいけど…………俺本当に嬉しかったんだ。あんなふうに言つて

もらえて」

心なしか、声のトーンが落ちたさくらに謝りながら、剣崎は言う。

「……ずっと、独りだったから」

聞こえるか聞こえないか、それくらいの小さな言葉が、彼の口から漏れた。ひよっとしたら、自分でも口に出してしまっているとすら気付いていないのではないか、というような声で。

表情をわざわざ見なくても、さくらには分かった。きっと今、彼はまた、あの寂しい目をしているのだろう——と。

「——剣崎さん」

意を決したように、呼びかける。

つい、と彼の視線が向けられるのを感じた。

「わたしも、お父さんと同じこと思ってます。剣崎さんは、少なくとも今は家族同然だって。だから——」

そう告げて、改めて剣崎のほうへ顔を向ける。彼の、不思議そうな眼差しと目が合った。

「だからもし、悩んでいることがあるんだったら……力になりたいです」

はつきりと、臆することなく言葉を並べる。剣崎が一瞬、小さく息を呑むのが分かった。

驚いたのだろう、自分の心の内を見透かしたかのようなさくらの台詞に。

だがさくらとしては、本当はもっと言いたいことがあった。

——どうして、こんな所へ来たんですか。

——剣崎さんは、どこから来たんですか。

——昔、崖から飛び降りたことなんて、ないですね。

——なんで、そんなにさびしそうな目をしてるんですか。

しかし、その全てを問いただすには時期が早すぎる。

すぐにでも確かめたいのが本音だが、さくらの中の直感が、まだ確かめてはいけないと訴えているような気がしてならなかった。

それらを最大限呑み込んだ上で選び出した言葉が、これだった。

剣崎に、さくらの本意がどこまで伝わったかは分からない。だが彼は、軽く目を伏せた後、淡く微笑みながら頷いてみせた。

「分かった。……でも、俺は大丈夫だから」

——その台詞は、一見すると素直でありきたりな返事に思えた。

それでもさくらには、どこか、自分と他を一線画そうとするかのような——遠まわしな拒絶が含まれているように感じられた。

「……あのさ、これから行くホームセンターって、どっち？」

「……えっ？」

唐突に尋ねられて、さくらはハツとする。歩いている砂利道が、目の前で二手に分かれていた。

藤隆から買い物リストと共に預かった大雑把な手書きの地図を取り出して、道を確認する。

「あ……え、えーとえーと……こっちですね」

現在地を確かめると、右手の道を小走りに進んでいく。

その際、少しだけさくらと距離が空いた隙を見計らったように、剣崎の唇が動いた。

「——こんな気持ちだったのかな、始め^{はじめ}」

彼の短い呟きは、地図と周囲の様子を何度も見直すさくらの耳に、届くことはなかった。

？・秘 A F F E C T I O N （後書き）

ギリギリ1万字未満で収めました……。

剣崎のカメラの扱いのくだりは完全な想像です。戦いで忙しくて、本当はそんなヒマなかったかもしれませんが。でも実はそんなやりとりがあつて、こっそり親交を深めていたらしいなーと思って書いてみた。

サブタイトルについて。「秘」は見て字のごとくですが、「a f f e c t i o n」は色々意味を持たせています。辞書では「愛情、好意。または感情の動き、感動」。木之本家と剣崎がお互いに心を許し始めていること、あとは前半で感極まりかける剣崎自身のことと解釈してください。

ところで――

感想返信でもちよつと答えたのですが、この作品におけるアバウトな時系列を説明したいと思います。

○2002年 『クロウカード』封印。さくらが主となる。（『CCさくら』原作6巻）

小狼、香港へ一時帰国。（『CCさくら』12巻）

2004年1月 B O A R D壊滅。（『ブレイド』TV第1話）以降、アンデッドとの戦いが続く。

2005年1月 剣崎、ジョーカー化。直後に失踪。（『ブレイド』TV最終回）

○2005年4月 さくら、中学校進学。小狼、日本へ帰還・再会。（『CCさくら』12巻ラスト）

2005年8月 さくら、家族旅行へ。剣崎と遭遇。（「ほしにねがいを」進行時点）

大雑把に年表にするとこんな感じ。○がついている所は、私的解釈により設定した部分。『ブレイド』に関係する時系列は、当時のドラマの放映日時に従っています。

当作品の舞台となっている時間を、『ブレイド』最終回時点の同年の夏とすることは決定事項でした。つまり、作中の剣崎はアンデッドとなつてからまだ半年ちょっとぐらいしか経っていない。作中のさくらが中学一年であることと合わせてここから逆算して、さくらと小狼が再会した時期、そしてさくらがカードキャプターとして活躍した年を割り出すようになります。ただし、実際『CCさくら』の原作最終巻が発行されたのは2000年7月……そうになると、さくらの活躍年がそれより後の2002年つてのは絶対におかしい……。しかし背に腹は代えられん、ということで無理矢理妥協しました。ごめんなさい。

そういえば、アニメでは『さくらカード』編放送開始時に、カードを納める本はピンク色の『さくらカード』仕様に变化しちゃってるんだよね……。でも、原作漫画ではそういう描写が一切なかったので、前の話でカードの本の描写をするときどうしようか悩みました。本来の『クロウカード』仕様のままだと、ピンクじゃなくて臙脂色ですから。結局色については一切触れていない描写の出来上がり……。ちよつと悔しいです。

以下は例のごとく余談……なんです。この小説にアクセスして下さっている読者の皆様に、是非とも目を通してほしいものがあります。ただし、当作品の内容自体には直接関係はありません。

それは私が書いた、11月18日と12月16日付の活動報告記事です。URLを載せるので、コピペで飛ぶか、あるいは私のユーザ情報ページから活動報告を見てください。

11月18日報告記事「大事なこと。」

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/45722/blogkey/5051/>

12月16日報告記事「イライラする」。

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/45722/blogkey/9035/>

近頃、他作品や、その感想投稿欄を眺めていて、私が考えたことをしたためました。面倒かもしれませんが、どうか一度だけでもいいので読んでいただきたいです。

もし内容に関して意見等あれば、メッセージにてお願いします。

ひよつとすると、今年の更新はこれで最後になるかもしれませんが、で、早いですが今のうちに。

メリークリスマス。そして皆様、よいお年を。

ちよつと勘違いされる方がいたので追記します。

ここにURLを掲載した活動報告記事に関しての意見は、そのまま記事にコメント投稿していただくか、メッセージにてお願いします。それ以外の内容、特に「ほしにねがいを」に対する評価や感想（面白いかどうか、あるいは良い所・悪い所の指摘など）は、こちらの感想投稿欄に書き込んでください。

どうか、場所と目的をしっかりとわきまえたコメント投稿をお願いいたします。

？・惑 CONFLICT

「――不束者ですけど、しばらく置かせてもらいます。よろしくお願ひします」

ホームセンターから帰ってくるなり、リビングの写真立ての中の撫子に向かって、剣崎が頭を下げながらそう告げた。

買ってきた品物を食卓テーブルに並べて確かめていたさくらや藤隆、桃矢は、その姿に面食らう。

ゆっくりと顔を上げた剣崎は、色とりどりの花を抱えた撫子が綺麗に微笑んでいるのを見ると、なぜか自分も満足そうに笑っていた。そして、食卓のほうにいるさくらたちを振り返り、ぽかんとしているのを見て、

「……あ。す、すみません、俺も一応挨拶しといたほうがいいかなって思つて……」

と慌てて言い繕った。

そんな剣崎に、三人は顔を見合せてから、ほとんど同時に口元を綻ばせたのだった。

テラスからすぐ出た所にある駐車スペース。そこには藤隆が運転してきた車がすでに止められ、隣にはスタンドで立てられたバイクが一台。

その横で、がしゃつ、と重い音を立てて、塗装の剥げた金属の工具箱が地面に降ろされる。

桃矢が慣れた手つきで箱を開けると、中から様々なサイズのドライバーやスパナ、レンチなどが現れた。

「すごいな……整備に必要な物がほとんど揃つてる」

上から覗き込んでいた剣崎が感嘆の声を上げる。

「ここを貸してくれた講師の人も、若い頃はよくバイクで走っていたらしい。今はもうやめてるけど、バイクで通う学生も招くようになったから、備えあれば憂いなしってことで、何があっても対応が利くように昔使ってた道具とかをありったけかき集めたんだと。……ほらよ」

ホームセンターから買ってきたばかりの軍手を取り上げた桃矢は、その一組を無造作にぽんと投げて寄越した。剣崎は咄嗟に受け止める。

「タイヤのスペアについては、父さんから礼言つといたから。さつさと済ませるぞ」

「……はい……」

反論の余地も許さないような一方的な口調の桃矢に、剣崎はたじろぎながらも返事をする。

桃矢がバイクの後輪側、剣崎が前輪側に回ると、車体を「せーの」で持ち上げて、慎重に横へと倒した。

そして、工具箱を軽くあさって必要な物を出そうとする桃矢だったが、そこへ「……あの」と剣崎に声をかけられて、手が止まる。

「やっぱり……俺一人でやります。俺のバイクだし。だから――」

「一つだけ言つとく」

おずおずと言う剣崎の言葉を遮って、桃矢が口を開いた。

「……あんた、俺より年上なんだろ。だったら敬語使うのは父さんだけにしてくれ。堅苦しいのは好きじゃない」

「…………え」

「それと、これは俺がやりたくてやってることだから。ちゃんと面倒見てやらねえと、うちの怪獣が後でうるせーし。……一つじゃないかったな」

言いながら、探していたサイズのスパナを見つけて取り出す桃矢。バイクの後輪部分を見て、タイヤを外す手順を頭の中で考えていると、すぐ傍で、ふっと笑う気配がした。

思わず睨むように視線を上げると、横で中腰になっていた剣崎が微笑を浮かべている。

「……なんだよ」

やや低くなつた声で問えば、剣崎は「あ、ごめん」とやや砕けた言葉で返してきた。

「そっか…分かった。じゃあ、今日から君とは普通に話すようになるよ」

「そうしてくれ。……で、何笑ってんだ」

要求通り、堅苦しさの抜けた調子で言う剣崎に、改めて聞き直す。

「いや。君たちって、仲のいい兄妹なんだなあって思ってたさ」

——がしょん。

桃矢の手から滑り落ちたスパナが地面にめり込んだ。

「——はっ？」

「だから、君と…あの子。さくらちゃんだっけ？ 喧嘩もするけど、少なくとも君は妹思いみたいだ」

呆氣にとられる桃矢に向かって、すっかり口の緩くなった剣崎は臆面もなく言つてのけた。

しばらくの間、桃矢は返す言葉が見つからず、金魚のように口をばくつかせる。

高校以来の親友約一名から「シスコンって知ってる？」とからかわれたことはあったが、こうもはつきりと「仲がいい」「妹思い」と言われた経験はほぼ皆無だ。

それをあつさり、しかも会ってからそんなに時間も経っていない相手に対して口にするとは、ある意味相当な度胸の持ち主だ。

——昨日といい、本当に調子の狂う奴だな……

まだ記憶に新しい「空き巣騒動」を思い出しつつ、桃矢はそんなことを考える。

とりあえず、落としたスパナを拾い上げ、

「…余計なこと言っでないで、あんたもやれよ」

ぶつきらばうに言い放ちながら、剣崎に押し付けた。彼はスパナを受け取ると、

「分かってるよ。どうぞお願いします」

とおどけたように答える。

そうして作業に戻ろうとしたが、

「でも、あんまり意地悪なこと言わないほうがいいと思うけど…。彼氏なんてできた日には、真っ先に煙たがられたりするかもしれないし」

剣崎がさらにその言葉を続けたので、また手が止まる。

声にも表情にもわざとらしさや悪意はまるで感じられないが、それがかえって質^{たち}が悪い。

——新手の嫌がらせか、と問いたしくなったが、墓穴を掘りそうなのでやめておいた。

「……いいから黙って手動かせ。あんたのバイクだろ」

代わりにそう釘を刺し、タイヤのホイールに手をかける。

ちらりと視線を上げた先では、バケツと雑巾を手にしたさくらが、コテージのリビングから二階へ上がろうとしているところだった。

きゅ、きゅ、と濡れ雑巾で窓ガラスを拭くと、うつすらと表面にかかっていた曇りが消える。

改めて見通した外の景色は、輪郭も色彩もより鮮明な光として入り込み、ケルベロスは柄にもなく、ほうと溜息を吐いた。

「おー…今日はなかなかええ天気やないかー。人の目がなかったら、今すぐにでも飛び出したい気分や」

そんなことをぼやくと、背後から、ちゃぷんという水音と共に「うん」と返事をする。

ケルベロスは自分の体格よりも大きい雑巾を持ち直して、隣の窓へと移った。

「ところでさくら。頼んだ通り、ちゃんとプリンを買ってきてくれたんやろな？」

再び拭く作業を始めると、また背後から水音と、「うん」という返事。

「それも、期間限定で出てる特大サイズのやでー。財布にやさしゅうないっていうのは分かってるけど、せっかくの旅行であえておとなしくするんやから、それぐらいは当然ってもんや」

背中の小さな羽根をぱたぱたと動かし、ガラスの上から下までを器用に往復する。

買い出しから帰ってすぐ、藤隆の指示でコテージ内の掃除をするということで、まず二階の窓拭きを請けたさくらに手伝うように言われて不満は募った。だがここで貸しを作っておけば、また後でお菓子でも何でも要求することができる。

そんな魂胆の元、普段は相当なものぐさのケルベロスは珍しくきびきびと働いていた。長い付き合いで、さくらもそれぐらいの下心は見越しているだろうが。

そしてやはり、背後から水音と、「うん」という返事。水を汲んだバケツで雑巾をすすいで絞っている最中のさくらの声だ。

「せやけど、やっぱり夏というたらアイスやなー。そういえば、昨日車の中でお父はんがアイス作ったとか言ってたな。……せっかくやし、一個くらいは食べておきたいなー」

今は冷蔵庫の中で静かに待っているであろう、カラムルの茶とカスタードの黄のコントラストが美しいプリンの姿を頭に描いた横に、カップの中できらきらと霜を煌かせるアイスのイメージを添えながら、締めりのない声音で言葉を紡ぐケルベロス。

背後から再度、「うん」という返事。

「アイス言ったらバナナが王道やけど、チョコ入りも捨てがたいなあ。あのお父はんやったらそれくらい用意しとるやろっし。ああでもイチゴ味なんかあったら最高やなー！ うーんこれは迷うでー、どないしょー」

気付けば、想像で生み出された色とりどりのアイスに夢中になるあまり、窓際の往復運動がすっかり止まってしまっている。

つぶらな目は今までで一番に近い輝きと期待を宿し、頬を染めて虚空を見つめる様子は、まるで夢見る乙女のようなようだ。下手をすればよだれまで垂れ下がりそうな勢いだっただ。

さくらからまた、「うん」という返事。

そこでようやく、ケルベロスは現実へと返った。

——気付いたのだ。さくらからの返事が、ずっと「うん」の一本調子で止まっていることに。

雑巾をすすいでいるはずの水音が、いつの間にかなくなっていることに。

いつものさくらならば、そろそろ「ケロちゃんって本当に食い意地張ってるよね」と呆れたようなコメントが入ってきていいということにもかかわらず、だ。

ケルベロスは窓際に浮遊したまま、くると振り返った。

部屋の真ん中へ置いたバケツの横で座り込んだ、さくらの姿が目に入る。

両手は、少し黒ずんだ雑巾を掴んだままバケツの水の中へと浸されているが、その手が動いている様子はない。

さくらの目も手元には向けられてはいるが、焦点は合っており、ただぼんやりと視線を投げやっているだけのようだった。

少しの間、さくらの姿を眺めたケルベロスは軽く頭を捻ると、思いついた台詞をわざとらしく口にした。

「……………夏休みだからって寝坊しとると、怪獣になってまうでー」

桃矢が散々からかいの言葉として使い古している禁句の一つ。

それを聞いてもなお、さくらは手を浸したまま機械的に「うん」と答えるだけだった。

——あちゃー…こりや重症やな……

心の中だけで呟きながら、ケルベロスは後ろ頭をぱりぱりと掻く。
普段ならすかさず「さくら怪獣じゃないもん！」とでも反駁はんぱくしてくるところだ。

その「怪獣」の単語にも食いつかないとなると、今のさくらは完全な上の空、ということになる。

掃除の作業もケルベロスの話もそっちのけで何を考え込んでいるのか——答えを導き出すのは簡単だった。

ケルベロスは、背中 of 羽根を使って滑らかな軌跡を描きながら宙を駆ると、動きの止まっているさくらのすぐ傍に寄り、ぽん、と肩を叩いた。

直後、さくらはハッと息を呑み、弾かれたような動作でその肩の方へ顔を向けた。

「——ほえっ？ ケロちゃん、なに？」

「なに？ はこつちの台詞や。さつきからずーっと人が話しとんのに返事もせんて……」

驚いた表情で今更なことを言うさくらに、ケルベロスは盛大な溜息を吐いた。途端にさくらは狼狽して、バケツへ突っ込んだままの手を雑巾と共に慌てて引き上げた。

「えっ？ ……あ、ご、ごめん、ぜんぜん聞いてなかった。なんの話？」

「それはもうええ——いや、ようないな」

目をしばたかせるさくらに問い返され、ケルベロスは諦めたように言いかけたが、すぐに言葉を紡ぎ直す。さくらは眉をひそめ、小首を傾げた。

ケルベロスは持っていた雑巾をバケツの縁に引っ掛けてから、改まったように真摯な眼差しを向けた。

「さくら。……そんなに気になるんなら、この際はつきり言ったらどうや」

唐突にそう口火を切られて、さくらは「…え？」と間抜けな声を漏らす。

「……い、言うつて…なんのこと…？」

「決まつとるやろ、あのひよる長いにーちゃんのことや。いつまでもそんなふうに頭の中だけで不信感こねくり回すくらいなら、面と向かつて聞きたいこと聞いてすつきりしたらええ」

「そんなこと——できるわけないでしょ！」

思わず声を張り上げてしまつてから、さくらは我に返つた。開けっ放しのドアの向こう、階段の方へと視線をやつたが、誰かが上がったくる気配はない。

ほつと胸を撫で下ろしてから、今度は声のボリュームに気を使いつつ口を開く。

「そんなの無理だよ…。大体、なんて言つて切り出せばいいの？」「夢の中で、あなたが林から出てきて海に飛び込むのを見たんです」なんて言つわけにもいかないし」

「そりゃー…夢のことは伏せなあかんやろ。でも、以前は何してたんですかーとか、どこに住んでたんですかーとか。うまーく情報引き出すとか色々あるやんか。なにをそんなに遠慮してんねん」

「だって…わたしだってほんとは知りたいけど、聞きづらい雰囲気なんだもん。剣崎さんもあまり触れてほしくないみたいだし」

「それは別に本人が、聞かんといってくれてはつきり拒否してたわけやないんやろ？ せやつたら、わざととぼけて気付いてないフリするとか、知恵を出してやな……」

自分なりに考えた手段をあれこれと提示するケルベロスに、さくらは渋い顔をする。考えあぐねたように口を嚙み眉間に皺を刻んだが、すぐにふるふると首を振つた。

「だめ、やつぱり無理に聞き出すなんてできない。あんなに切なそうな顔して思い出してたんだもん…：よっぽどのがあつたんだよ」

「いや…でもなあ」

「——じゃあ、ケロちゃん是他の人にぬいぐるみ呼ばわりされたこととか、本当の姿に戻ったとき、わたしや知世ちゃんに『誰？』っ

て言われたこととか、思い出すようなこと言われても平気なの？」と、不意打ちで並べられた過去の屈辱的な出来事に、ケルベロスの顔から火が噴き出した。

「なっ——なに言うてんねん！ いやなこと蒸し返すなや！ ああ——思い出しただけでほんま腹立つ……！！」

「それと同じなんだよ」

いきり立ちながら空中で地団駄を踏むケルベロスに、さくらは水を含んだ雑巾をしっかりと絞りつつ告げる。

「きつと今の剣崎さんもそういう気持ちなんだと思う。いやな思い出とは限らないかもしれないけど——それでも、話したりするのは辛いんじゃないかな……」

言葉を続けながら、脳裏に剣崎の顔を浮かべる。

——寂しげな眼差し。時折影の落とされる声音。

無論、明るく優しく穏やかな笑みと言葉を投げかけてくれることのほうが多いが、その屈託のなさや、忘れた頃に垣間見られる曇りのようなものを余計に際立たせていた。そして直後に、慌てて取り繕うために作られる困ったような笑顔が、さくらにはなんとも痛々しく感じられて仕方なかった。

しかしその様子が、ますます剣崎の過去に何かがあったことを臭わせ、さくらが一人思い悩む時間を増やす、という悪循環の構図を組み上げつつあるのも事実だった。

「……ほんなら、このまま何にも聞かんと、黙って過ごすつもりか？」

腕組みをしたケルベロスに問われて、さくらは立ち上がりながら「——分かんない」としか答えられなかった。

「あのにーちゃん、いつまでもおる訳やないんやろ。今のうちにはつきりさせといた方がええと思うけどなあ」

「それは……分かつてる……」

しどろもどろな返事をしつつも、雑巾を窓ガラスに当てて、約一年分の汚れを拭き取って行く。

ケルベロスはその窓辺に降り立つと、神妙な様子で「うーん……」と低く唸った。

「——まあ、好きにしたつたらええわ。とにかく、あんまり思い詰めんようにしいや」

若干腑に落ちないようなニュアンスを含めはしたものの、ケルベロスはそう言い置いてから、バケツに掛けっ放しにしていた雑巾を取りに戻る。

「……そういうケロちゃんも、なんだか変だよ？」

その姿を目で追ったさくらはふと尋ねた。

「昨日まで剣崎さんのことあんまり気にしてなかったのに、帰ってから今朝の夢のこと話したら、急に色々知りたがって……」

さくらの質問に、ケルベロスは「うん？……いや、まあな」と曖昧に返す。

いつもは大雑把で、細かいことはあまり気に留めないケルベロスが、これから顔を合わせる訳でもないような部外者に関心を抱くのが、さくらには珍しかった。夢に関係している、という特殊な要素があるとはいえ、一方では「力の気配はない」とも言っていたし、何故そんなに注意を注ぐのか理由が分からない。

すると、ケルベロスは軽く逡巡をした後に、「……実はな」重々しく言葉を発した。

「さつき、さくらが出かけるとき……あのにーちゃんと目が合った」
「——えっ?!」

思いがけない答えの内容に、さくらは手にした雑巾を取り落としそうになった。

「いや、わいの気のせいかもしれんけど。窓からさくらのことを見とつたら、あのにーちゃんがこっち見上げてたんや」

その時のことを思い出したのか、ケルベロスは暑さとは別な意味での汗をかいている。さくらは雑巾を持ち直しながら、

「……剣崎さんが、ケロちゃんに気付いてるってこと？」

と聞いた。もしそれが事実なら、話は別だ。

「さあな……少なくとも、あのにーちゃんから、さくらに何か聞き出そうとしたりはしなかったんやろ？　ほんなら、ただのわいの思い過ごしってことで済む。——けど、」

先刻、途中で拭くのを中止した窓の方へと戻り、その向こうの鬱蒼とした雑木林を遠い目で眺めながら、ケルベロスは続けた。

「——万が一、思い過ごしとちゃうかったら……あいつは只者タタモンやない。用心したほうがええかもしれん」

きゅっ、と雑巾で擦ったガラスが鳴き声を上げる傍ら、さくらは胸の内を覆う不信感と、それを打ち消したい気持ちに、思わず唇を噛み締めていた。

タイヤと諸々の部品を外され、半分解体されたようになった身を地面にさらしている、青みがかった鉄の馬。

その部品を一つ一つ拾い上げては、軍手の指先がタオルで表面を丁寧に拭き、あるいは小さなブラシでこびりついた土くれをこそげ落とし、あるいは薄くワックスを塗って綺麗に磨き上げていく。

改めて光沢を与えられた部品は、新品同様とまではいかないまでも夏の日差しの下で、表面に残った傷すらも誇らしげに輝かせていた。「さすがにすごい汚れたなあ……ヘタすると一年以上手入れしてなかったもんなあ、こいつ」

手に取った部品を裏返しながらばやいた剣崎に、桃矢は非難じみた目を向けた。

「……よく今まで事故らないで生きてられたな。あんた」

ちくりと突き刺すように言くと、剣崎はびくつと肩を揺らしてから

「……あ、あはははは」と誤魔化し笑いを返す。

桃矢は苦虫を噛み潰したような顔でそんな剣崎を一瞥したものの、すぐに視線を作業する手元へと戻した。

コテージからは、自然に囲まれた緑の中には不似合いな、掃除機の低い駆動音——藤隆がかけているのだろう——が聞こえる。

その単調な音と、風に揺れる葉の音、そして鳥や蝉の鳴き声を背景に、二人は黙々と整備を続けた。

しかし不意に、剣崎が思い出したように口を開く。

「——あつ、あのさ。一つ聞きたいんだけど、さくらちゃんって小動物が何か飼ってたりにしてんのかな」

その問いに、桃矢の手がぴたりと止まった。

視線が手元から動くことはなかったが、わずかに宙を泳いだ瞬間があった。

桃矢は引き結んでいた唇を軽く湿してから、

「……なんでそんなこと聞くんだ」

と落ち着き払った声で問い返す。

「ん？……いや、別に意味はないんだ。ただ、あれくらいの歳の子って生き物とか飼いたがるもんじゃないかな……とか思ってた……」

よく分かるような分からないような理由を述べる剣崎。

嘘だな、と桃矢は直感した。しかし、

「——いや。飼ってねえよ、何も」

と、あえて掘り返すようなこともなく、同時にとぼけ返してみせた。

——正確には、一匹飼っている。というより、くつついていると表現すべきか。

小学生の頃からさくらが「ぬいぐるみ」と称して部屋に置き、出先には必ずと言っていいほど連れ歩いている、羽根の生えたオレンジ色の小さな生き物。

厳密に「生き物」と言っているのかどうかという点はともかく、とうの昔に正体は見抜いていた。

一応、さくらとその当事者自身は誤魔化し通しているつもりのようにだが、わざわざ言及するような必要もないだろうと思い、結局、存在に気付いて数年が経っても隠し隠されの現状がずっと続いている。

「そっか……うん。だったらいいんだ」

桃矢の答えに、剣崎は若干首を傾げるような様子を見せながらも、何度か一人頷いて、そのまま作業に没頭した。

桃矢は横目でそんな剣崎をちらりと見たが、すぐに自分も同じように、止めていた手を再び動かし始めた。

うだるような暑気の中を、さあつ、と束の間の涼風が通り過ぎていった。

？・惑 CONFLICT （後書き）

明けましておめでとうございます…とりたいところですが、明けすぎですねごめんなさい。2010年一発目の更新です、約一ヶ月ぶりになります。そろそろ痺れを切らした読者様に見放されそうな気がするのと、とりあえず私事で一番大きな山越えたので、続きをUPさせていただきます。

しかし相変わらず進歩がありません。我ながらなんでこう回りくどい文章しか書けないのかしら。とりあえず、第一目標は碎けた調子で話すいつもの剣崎へ回帰、ってところでしょうか。ド天然で他人の凶星を突き刺して、ちよつと一目置かれる彼を書いてみたかったです。そういう意味じゃさくらと似てるかもしれない、なんて思いつつ。でもってそれで調子崩されてツンする桃矢兄ちゃんも書いてみたかったんです。

バイクのお手入れ風景は完全な想像です。実際どうやんのかはよく分かってません。でも一応タイヤの外し方みたいなサイトは軽くググりました。ぺっかぺかの新品バイクもいいけれど、いい感じに年季の入ったバイクもかっこいいよねとか言ってみる。

タイトルについて。conflictは争い・矛盾・対立とか色々意味がありますが、ここでは「葛藤」という意味が強いです。まあさくらの心情をストレートに掲げました。ひねりがないとも言っ。次回更新なんです…ひよつとしたらまた間が空くかもしれません。まだちよつと色々やることあるので、下手すると2月まで持ち越し…：本当にごめんなさい。感想・メッセージ・コメントの返信もちよつと遅れる恐れがあります。相も変わらずこんなペースが続きますが、ともあれ今年もどうぞよろしくお願いいたします。

余談。

前回更新にて紹介した活動報告記事に、多くの方々から意見をいただきました。読者と作者、色んな方の声や本音を聞くことができ、大変参考になりました。ありがとうございます。あの記事と反響が、少しでもこの「読もう」サイトの環境を変える後押しになってればいいな…なんて祈ったり。

日の長い真夏。それでも夜は訪れる。

中天に輝いていた太陽は沈み、蒼穹を黄昏色に染め上げながら山並みの向こうへと沈んでいく。

夜の帳が、小さな星をちりばめながら下りていき、空気に湿った熱は徐々に冷め、心地よい夜風が青葉と水面を静かに撫ぜた。

薄暗い夕暮れの中、コテージの灯りで照らされた裏庭から薄い煙が上がっていた。

煙の出所では、ホームセンターで買ってきた固形燃料と、元々あった薪を燃した火が、鉄板の上に並べられた野菜や肉を炙っている。

エプロンを着けた桃矢は、焼き加減を一目見てはひよいひよいとひっくり返し、皿へと移していった。

「手際いいんだなあ。驚いたよ」

横から新しい皿を手渡しならばやいた剣崎に、桃矢は「まあな」とだけ答える。

「飲食店でもバイトしてたから、その成果なのかな？」

少し離れた所に組み立てたキャンプ用のテーブルに、コテージのキッチンで作ったサラダを置きながら藤隆が言くと、「そんなところだ」と返した。

「お兄ちゃんって、本当にどこでもバイトしてるのね……」

紙コップを取り出し、飲み物のペットボトルを運んでいたさくらが、半分呆れたような声を漏らした。この兄妹の間ではもう常套句と化した台詞だ。

「そっか……今日のバイク整備手伝ってくれたのも、バイト経験あつてのことなんだよな。大学も通ってるのに働くなんて、偉いよ」
「別に珍しくもないだろ。あんただって、それくらいの経験はある

んじゃないのか？」

「……………」

言いながらにこにここと笑う剣崎だったが、桃矢に切り返された途端、言葉を詰まらせた。

返事がないのを不審に思った桃矢は、具材をひっくり返していた手を止め、横目で様子を窺う。

硬直した笑顔を浮かべたまま立ち尽くしている剣崎の姿が視界に入った。

「……なんかまずいことでも言ったか？」

とりあえずそう尋ねると、剣崎は「いや、そんなことはないけど」と答えたが、どこかばつが悪そうに頬を掻いた。

「まあバイトとか——仕事をしたことはあるにはあるけどね。今は事実上無職、ってとこかな」

ははは、と空笑いをして、あっけらかんと打ち明ける剣崎。

桃矢はしばし、どんな反応をしようか考え込んでいたが、興味を失くしたように「……ふーん」と相槌だけを打って、手にした菜箸を再び動かし始めた。

さくらはペットボトルのウーロン茶をコップに注ぎながら、そのやりとりをぼんやりと眺め、同時に、昼間に窓掃除をしながら交わしたケルベロスとの会話を思い出していた。

・ さくら 回想モード ・

「——ただ者じゃないって、どういうこと？」

ケルベロスの放った結論に、さくらはそう問い詰めた。

「剣崎さんも、観月先生やエリオル君みたいに魔力を持ってるってことなの？」

「それはない。あのにーちゃんには魔力はあらへん……これだけは確実や」

と、ケルベロスはさくらの言葉を即座に否定する。目の前の窓を端

まで拭ききると、雑巾を脇に置いてから、窓際の狭いスペースに腰掛けた。

「ただな……やっぱり、さくらの夢の中に出てきたってことがひっかかる。あのーちゃんとこうしてここで出会ったのも、なんか意味があるかもしれん。それに、わいのことに気付いているとしたら――」

「……でも、ケロちゃんに気付いているのは、お兄ちゃんだっていつしよじゃない」

「桃矢にーちゃんはまだええ。さくらが隠しごとしとるって分かったのは、さくらとずっと暮らしとるからや。兄妹なら様子がおかしいって感づいても普通やし、ぬいぐるみのフリしとるわいを実際に何度も見てれば怪しんだって不思議やない。あの頃の桃矢にーちゃんには魔力もあつたしな。」

けど、あのにーちゃんは違う。わいを直接見たわけでも、魔力があるわけでも、さくらと長いこと一緒にあったわけでもない――それなのに、わいに気付いてるような素振りが見えるっちゅうのは普通と違う。いくらなんでも、鋭すぎる」

反論を仕掛けるさくらだったが、ケルベロスはきっぱりと断言した。その内容は的を射ており、さくらも納得せざるを得ない。

「……だったら、剣崎さんは……いったい何なの？魔力がないのに普通じゃないって、どういうこと？」

――自分のことに気付いているかもしれない、何か隠しているかもしれない、夢に出てきたのは意味があるのかもしれない、普通じゃないかもしれない、……

ケルベロスが述べる剣崎の不審点はどれも遠回しな言い方で、間接的な表現の域を出ていない。

だからこそ、さくらは求めた。

はつきりと、剣崎がなにものであるのかという、直接的な答えを。すると、ケルベロスは腕組みをしながらしかめっ面を浮かべた。しばらくその姿勢で低く唸ってから、怪訝な視線を向けているさくら

を改めて見据え、口を開く。

「さくら……一つだけ覚えとき」

いつになく奥深い響きを持ったケルベロスの声音に、さくらは「……ほえ？」と首を傾げた。

「世の中にはな、たとえ魔法が使えても、それでも説明のつかんものにありふれとるんや。ただそれが、表に出てない、あまり知られてないっていうだけでな。

——せやから、魔力がないイコール普通の人間、ていうふうに決め付けんことや。

現に……さくらはこの冬、魔法じゃ説明できんものに遭つとるやろ？」

らしくもない落ち着いた口調で諭されて、さくらは気まずそうに視線を逸らし、手の中の雑巾をぎゅっと握り締める。

そうだ。忘れもしない、この冬……年が明けたばかりの寒い時期。

かつての『クロウカード』を介して魔法を知ったさくらは——いや、さくら達は、その時の経験だけでは説明できない、不可解な存在に接触した。

そして、それが一体何だったのか、季節一つ分を越した今になっても答えは得られていない。

しかし、いつの間にか事態は収束し、さくらが魔法をもってしてもどうにもならなかったのをよそに、周りはいくちか平穏な日常を取り戻している。

何が起ったのか、どうということなのか、分からない。

だがあの時どこかで、何かがあって、誰かがどうにかした——そんな曖昧な想像をこね合わせたような結論しか、さくら達には出せなかった。

思い起こしたさくらは、ただ黙って頷くことしかできない。

「……けどな。だからって、あのにーちゃんと仲良くしたらあかん

「つちゅうわけやない」

不意に、それまでの張り詰めた声のトーンが和らぎ、さくらは伏せていた目を上げる。

窓際に座ったケルベロスは組んでいた腕を解いて、明るい笑みを見せていた。

「さくらが構いたくなる気持ちも分かるし、今のところ危ない奴って感じもせえへんしな。あの桃矢にーちゃんがそれなりに気を許しとるんやったら、まず大丈夫やろ」

さらりと言われ、さくらは先刻までの重々しい態度との落差に「……ほえ」と間拔けな声を漏らす。

「色々気にはなるけど……せつかくの家族旅行。今は思う存分満喫しいやー!」

「う……うん、そのつもりではあるけど」

「よっしゃ。そんなら、ちゃっちゃと掃除終わらせるでー!」

さくらの返事を聞くや否や、急に意気込み、雑巾を抱えてバケツに向かうケルベロス。

その様子の変わりように追いつけず、さくらはしばし手を止めたまま、目をぱちくりとさせた。

「なんかケロちゃん、すごく張り切ってるね……」

ぽつりと呟くと、ケルベロスは「ん？まあなー」と答えた。

「それよりさくら。ちよつと大事な話があんねんけど」

「……え、なに？」

尋ね返したさくらだったが、ケルベロスの顔をふと見直して「あ、聞かないほうがよかった」と後悔した。

なぜならケルベロスの目と表情は、これ以上ないほどにきらきらとした輝きに満ち溢れていたからだ。

そんな輝きをもたらす要素が何なのか、さくらは知っている。そして。

「——今日のバーベキュー、モダン焼き作る予定はないんか？」

予想に違わない台詞がケルベロスの口から出たのを受けて、さくら

った藤隆と剣崎が「ああ……」と半ば諦めたような声を漏らした。

「……おい。何やってんだよ、さくら」

煙を上げる鉄板から離れられない桃矢が、呆れたような言葉を投げかける。

「ご、ごめんなさい！ わたし、ぼーっとしてて……！」

「大丈夫。とりあえず、料理だけ避難させて……剣崎君、その袋に布巾が入ってますから、お皿をよけたら拭いてください」

「あつ、はい！」

ペットボトルを抱えたまま、おろおろするさくらに穏やかに言葉をかけ、落ち着いた様子で藤隆は剣崎に指示した。

盛り付けた皿がプラスチック製だったのは幸いだろう。市販の安い紙皿で済ませていたなら、こぼれたウーロン茶でふやけてしまい、皿の役目を果たさなかったに違いない。

藤隆が手際よく皿をテーブルから取り去り、傍の簡易イスなどに置くと、剣崎が布巾で天板を拭いていく。

さくらは申し訳なく思いながらも、重いペットボトルを手放すわけにもいかず、後始末をする二人を横で眺めることしかできなかった。

「どうしたんですか、さくらさん。何か考え事でもしてたのかな？」
一通り料理の避難を済ませた藤隆がさくらに歩み寄ると、ペットボトルを受け取り、テーブルに放置されていたキャップで注ぎ口を閉める。

尋ねられたさくらは一瞬戸惑って、思わず剣崎の方へ視線を動かした。

当の本人はテーブルを拭く手を動かしながらも、藤隆と同じように気になっていたのか、どこか気遣うような目を向けている。

「あ、あの……えっと……」

——正直に「剣崎さんのことが気になった」と答えるわけにもいかない。目を泳がせながらも、どうにか知恵を絞った。

「えっと、ここにいる間、夏休みの宿題どうしようかなーって考えてたら、お茶注いでるの忘れちゃって……」

そう言い訳をする——本音でもあるが——剣崎と藤隆は「ああ」と頷いた。

ところが、

「ほおー。毎年始業式近くになってから慌ててやり始めるのに、今年はずいぶん気が早いんだな。怪獣」

と、桃矢がいつもの調子でからかうので、反射的に睨み付ける。

「なっ……何よう！ わたしだって毎年毎年おんなじ失敗ばかりしないもん！ 今年はちゃんとかと余裕があるうちに、やり残ししないように宿題全部終わらせるんだから！」

「……“今年こそは”、だろ」

口の端に意地の悪い笑みを刻んで、きつちりと訂正する桃矢。

反論できない事実には、さくらはぎりぎり歯を噛みしめた。他に誰もいなければ「くやしいー！」と叫び散らしているところだ。

「まあまあ……そうカッパするなって。君もあんまり意地悪するなよ！ けど、夏休みの宿題か……懐かしいなあ」

凄まじい顔で見据えているさくらと、それを意にも介さない桃矢を宥めるように剣崎が声をかけた。

テーブルを拭き終えた布巾を軽く畳み直し、視線を遠くへと投げやった。

「俺も紙粘土で工作したり、日記書いたりしたっけ。一回、育てた朝顔枯らしちゃったりして」

「そりゃ小学生の宿題だろ。ていうか枯らしたって……水やりでもさぼったのか？」

「いや、その逆。水やりすぎて、根腐れしたんだ」

質問に答えながら、剣崎が乾いた笑いを返すと、桃矢は呆れたように嘆息する。

「た、大変でしたね……」

呟いたさくらに、剣崎はその時のことを思い出したのか、やや渋面を浮かべて「うん……」と頷いた。

「でも、俺も毎年似たような感じだった。休みが終わり近くならな

いと、なかなか宿題に手が付かなくて、てんやわんやしてたよ」

「ほんとですか？ わたし、小学校の頃から算数が苦手で、今も数学がよく分からなくて……気づいたらいつも後回しになって、余計に大変になっちゃうんです」

「あー分かる分かる！ 時間がないって思うと、ますます集中できなくて、解ける問題も解けなくなるんだよね」

「ですよーね！ それでも、最後の日にはちゃんと終わって安心するから、次の年もまた同じこと繰り返したりして……」

「休み中の学校の宿題なんて、みんなそんな感じだって。なにも恥ずかしいことじゃないさ」

「あつ、そうなんですか。なんか、そう言ってもらえるとちよつと安心するかも……」

「——おい、その居候。うちの妹に不謹慎な事を吹き込むな」

夏休みの宿題の話に花が咲き始めたさくらと剣崎に、桃矢が少々冷やかな口調で会話に割り込んだ。

具材をあらかじめ焼き終えたのか、鉄板を離れて、テーブルにがちゃりとやや乱暴な音を立てて皿を置く。

咎められた剣崎は肩を竦めて、「スイマセン……」と小さく謝った。

「さくらさん。勉強で分からないことがあるんだったら、ぼくや桃矢君に遠慮なく聞いていいんですよ？ 分からないままにしておく、と、ますます難しく感じられてしまいますから」

避難させていた料理を元の場所に置き直して、藤隆が教員ならではのアドバースを口にする。

しかし、さくらは「うーん……」とはつきりしない返事をした。

「それは分かっているんだけど……お父さん忙しいし。お兄ちゃんに教えてもらうと、いつも家事の当番代わって言うんだもん」

「世の中、ギブアンドテイクだ。成績落ちるよりはましだろ」

「そういうふう言うから余計にいやなのー！ いいもん、わたしだってやればできるんだからー！」

至極当然といった風情で開き直る桃矢と、不機嫌そうに頬を膨らま

せるさくら。すると、剣崎が何か思いついたように「あつ」と声を上げた。

「——じゃあ、俺が見てあげようか？ 夏休みの宿題」

思いがけない申し出に、さくらは目を見張った。

「い、いいんですか!？」

「ここにいる間でよければ。始業式近くにバタバタしても悪くはないけど、進めておいたほうがいいに越したことはないしさ。あと俺、これでも一応高校は卒業してるから」

と、照れくさそうに微笑みかける。

ぱあつと表情を明るくして、さくらは「お願いします!」と勢いよくお辞儀をした。

そして同時に、深い安堵を覚えていた。

——よかった。やつぱり、剣崎さんは悪い人なんかじゃないんだ……
——ケロちゃんも「満喫しろ」って言ってたし。今はむやみに怪しむのはやめよう。

そう思い直して、心からの笑顔を剣崎に向ける。剣崎も、そんなさくらの反応が嬉しかったのか、穏やかに笑い返してくれた。

「それじゃあ、剣崎君もさくらさんも、これ持ってくださいね」

不意に藤隆が、両手に持っていたウーロン茶入りの紙コップ（いつの間にか淹れ直したらしい）を二人にそれぞれ渡す。

さくらと剣崎はきょとんとしながらも、言われるがままにコップを受け取った。見ると、桃矢もすでにエプロンを外し、同じように紙コップを手をしている。

そして藤隆もまた、テーブルの上にあったコップを持ち上げて、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「今日はみんな、お疲れ様でした。さくらさんが手伝ってくれたお陰で、頼まれていたコテージの掃除はあらかた終わったし、桃矢君と剣崎君も……まだ残っている作業があるみたいだけど、バイクの

整備はだいぶん進んだようですね。明日も頑張ってください。

——それで明日のことなんだけど、整備はうまくいけば午前中に終わるということで、それが済んだら、お昼にお弁当を持って、近くの湖へピクニックに行きましょう」

「ピクニック?!」

藤隆の言葉に、さくらは目を輝かせた。

「ええ。ここから歩いて行ける距離に、綺麗な湖があるんだって。せっかくの旅行だし、思う存分自然を味わいましょう」

「やったあ! お魚さんとか白鳥さんに会えるかなー?」

今にも飛び跳ねそうな勢いで喜ぶさくらだったが、飲み物の入ったコップが手の中にあるのを思い出すと、軽くガツポーズをとる程度にとどめた。しかし、

「お前が本当に嬉しいのは弁当の方だろ。なんてったって怪獣だからな」

という桃矢のからかいに、一瞬、コップのウーロン茶を顔めがけてかけてやりたい衝動に駆られる。どうにかこらえて「怪獣じゃないし、そんなに食い意地張ってません!」と、反論だけはしておいた。「剣崎君も。今日はずっと働きっぱなしでしたから、明日は一緒にのんびり観光しましょうね」

「あつ……はい。分かりました」

言葉を向けられた剣崎は軽く虚を突かれながらも、律儀に答える。

「残り数日間もよろしくお願いします。今日はたくさん食べて、ゆっくり休んでください。」

——それじゃ、乾杯!」

藤隆が紙コップを軽く揺らし、にこやかに宣言した。

すると、桃矢が続けて「乾杯」と小さく復唱する。

そこでさくらは、剣崎の方へと体を向け、少し高い位置にある彼のコップに自分のコップを合わせるように「乾杯!」と掲げてみせた。剣崎は少し驚いた様子だったが、すぐにその意を察して、「…乾杯!」と、さくらと自分のコップをそつとぶつけて応じる。

四人はそのままウーロン茶をあおった。そして、そのコップをテーブルに置くや否や、

「――よし。じゃ、あとは早い者勝ちだ。いただきます」

と真っ先に桃矢が、手近にあった皿と割り箸を取り上げた。

「ああーっ！ お兄ちゃんずるい！ そのじゃがいもとソーセージ、わたしが食べようと思ってたのに！」

「……だから早い者勝ちだって言っただろ。皿は他にもあるんだから、文句つけるな」

もごもごと咀嚼しながら、さくらの抗議をさらりと受け流す。さくらは不満を覚えながらも、仕方なく他の皿を手についた。横で見ていた剣崎がくすくすと笑う。

そこへ、同じように皿を取ろうとした藤隆が「あっ！」と息を呑んだ。

「いけない……デザートに梨を出そうと思ってたのに、切っておくの忘れてました」

すっかりしたようにそう言って、テーブルの足元に置いていたクーラーボックスから、梨と、鞘に収められたままの果物ナイフを取り出した。

「ごめんね。今から剥きますから……」

「――あの！ 俺やってもいいですか？」

傍の簡易イスに腰掛けようとした藤隆に、剣崎が片手を挙げて尋ねる。

藤隆は一瞬きよんとしていたが、

「ええ、構いませんけど……大丈夫かな？」

と聞き返した。

「大丈夫かな」というのは、要するに「皮むきができるのか」という意味だろう。家事慣れしている藤隆は朝飯前だが、残念ながら果物の皮むきというのは誰もができる芸当ではない。苦手なのに無理をしてナイフを握っても、果物の方がぼろぼろになるか、手が傷だらけになって恥をさらしてしまうだけだ。しかし、剣崎は

「大丈夫です。任せてください」

迷いのない調子で言い切った。

藤隆は少し躊躇いながらも、梨の実とナイフを手渡す。剣崎がそれを手にすると、さくらはテーブルに置いてあった小さなボウルを差し出した。

「サンキュ」と礼を言っ受取り、剣崎は藤隆に代わって簡易イスに腰掛け、そのボウルに梨を放り込み、膝の上にのせる。

右手に握ったナイフの鞘を外すと、鈍色の細長い刃が顔を出した。剣崎は丸い梨の実を左手で包み込むように持ち、決して平らではないその表面に、慎重に刃を当てる。薄皮に刃が食い込むと、左手の指先を使って、梨の実だけを回転させていく。動きに従ってナイフの刃は梨の表面を上から綺麗に撫でていき、同時に皮が実から剥がされていった。

「剣崎さん、すごい！」

「いや……それほどでもないって」

さくらの興奮した声に答えながらも、剣崎は手元から目を離さない。そうしている間にも、剣崎の手の中で、梨は瑞々しく甘い芳香を放ちながら白い剥き身を徐々にさらしていき、細長い蛇のように垂れ下がった緑黄色の皮がするすると渦を描くようにして、ボウルの中に横たわっていった。

「へえ……意外な特技だな」

「“意外”って……ちよつと傷付くんだけど……」

感心して見ている藤隆の後ろから覗き込んだ桃矢のコメントに、剣崎は苦笑するが、細く薄い皮は途切れることなく、手とナイフの動きにも淀みはない。

——あつという間に、梨の実の上から下まで綺麗に皮を剥かれ、あと2周ほどで終わり、というところまで来た。

「やっぱすごい！ お父さん以外でこんなに上手に皮むきできる人初めて見ました」

「ははは。そんなに大したことじゃないから……——ッ!？」

さくらに話しかけられて注意力が途切れたのと、あと少しだという油断のためか。剣崎の手元が僅かに狂った。

薄皮のみを剥いでいたナイフの刃がぐりと傾き、実を押さえたい剣崎の親指の腹へ食い込むのを、さくらは確かに見た。

「いてっ！」

剣崎は咄嗟にナイフと梨をボウルの中へと放り出し、ナイフで切った左手の親指を、右の掌で包み込むように押さえた。余裕だった表情が途端に歪み、痛みをこらえるように眉間へ皺を寄せる。

「だっ、大丈夫ですか!？」

さくらは慌ててナイフと梨の実と皮が入ったボウルをテーブルに移動させ、剣崎が右手で覆っている指を診ようと手を伸ばした。その瞬間。

「——触るなッ!！」

剣崎は、まるで血を吐くような激しい語気で叫び、座っていたイスを蹴倒す勢いで、さくらの手から身を引いた。

怒声じみた言葉と、豹変した剣崎の形相に、さくらは息を呑んで硬直する。桃矢と藤隆も同じだった。

指を押さえたまま荒い息を吐き、鋭い眼光で三人を睨み返す剣崎。

——警戒心を剥き出しにして敵を威嚇する獣を思わせるその姿は、つい先刻まで気安く応じてくれていた彼自身とはまるで別人だ。

しかし、それもほんの僅かな時間のことだった。

やがて、ハッと我に返ったように顔色を変え、目の前で呆然としているさくら達に気付く。

「……あつ、す……すいません！俺……！」

頭を下げて言いかけるものの、剣崎の口からそれ以上言葉は続かなかった。

「……えっと……大丈夫かな？指、切っちゃったよね？」

どうにか平常心を取り戻したらしい藤隆が確認すると、剣崎は小さ

く頷いた。

「はい……あの、絆創膏ももらえますか」

「ええ。コテージのリビングに、救急箱が置いてありますから」

藤隆の答えに、剣崎は「すみません……」と恐縮した様子で再度謝ってから、指を押さえたまま、こちらに面しているコテージの勝手口へいそいそと向かう。

「——あの！ わたし、手当てします！」

慌ててさくらが後を追おうとしたが、即座に

「いや、いい！ 大したケガじゃないから！」

と断られてしまった。広い背中を向けたまま勝手口のドアを開けると、剣崎は振り返ることもなくコテージの中へと消えた。

「……………なんだよ、今のは……」

眉をひそめた桃矢が小さく呟く。

さくらは剣崎が入っていった勝手口を見つめた後、テーブルに移したボウルの中へと視線を動かす。

薄い夕闇の中で、果物ナイフが鈍く光を反射している。それを静かに眺めるさくらの脳裏で、ケルベロスから受けた忠告が甦っていた。

世の中にはな、たとえ魔法が使えても、それでも説明のつかんものにありふれとるんや

せやから、魔力がないイコール普通の人間、ていうふうに決め付けんことや

さくらの手は無意識に、Ｔシャツに隠れた小さな星の鍵を握り締めていた。

ばたん、と背後で勝手口の重いドアが閉まる。剣崎は無言でそのドアに寄りかかり、天を仰ぐと、深く嘆息した。

「……バカだなあ、俺……なにやってんだよ……」

自分にだけ聞こえる程度の、小さな声。

剣崎は視線を落とすと、ナイフで切った親指をずっと押さえ続けていた——いや、隠し続けていた右手を、ゆっくりと開いてみる。

ナイフの刃が付けた切り傷は塞がっていた。代わりに緑白色の体液が、その痕にべたりとこびりついている。

「……………」

剣崎は再度嘆息し、もう片方の親指で、すでに凝固したその血をこそげ落とした。

？・審 CONCEAL（後書き）

久々の更新です。大学でやることがようやく一通り終わりました。お待たせしまして申し訳ありません。

——ていうか、ごめんなさい。一話につき10,000字未満の公約をととう破りました。空白・改行含むと一万字を普通に超過します。まじごめんなさい。でも空白と改行除いたらセーフなんだぜ！とか言い訳してみる。

そして、一万字超してるくせに内容薄っ……！ちつとも進んでないよ、まさしく内容がないよう！？アレですね、回想モードに字数を割きすぎました。『C・C・さくら』の原作を見るとおなじみの「回想モード」。二次創作書く際にも絶対入れようと誓っていました。——便利ですね、これ。

剣崎は果物の皮むき上手説は、まあいつものごとく想像です（いい加減にしろ）。『ブレイド』の初代OPで彼が皮むいたリングを齧ってるカットがあるんですけど、ネットの噂によると中の人の椿さんが皮むき得意だったかららしいということ。でも真偽は不明。なんだか、この小説の剣崎がどんな何でもできてエリートチックになっちゃってるんですが……そろそろ自重します、すいません。あと、私の予想では剣崎の最終学歴は高卒ってことになってます。本当はどうか知らないけど。独り身だし、高校出てからはアルバイトとかを転々として、その最中でBOARDにスカウトされたんじゃないかろうかと。ちなみに橘さんは外国の大学卒だそうで。研究者ですからね。

サブタイトルについて。concealは、え〜と……（電子辞書参照中）……（物事や感情を）隠す、秘密にしておく……という意味です。漢字の方の「審」は、「審^{つまひ}らか」という読み方もできて、詳しいとか事細かとかそういう意味があります。concealとは対

義語の関係ですが、あえて採用しました。

いつもの余談。

前回更新時にもらった感想をきっかけに、剣崎のイラストなんつーものを描き始めた。イラスト自体は昔からちよこちよこ描いてはいたんですが、あんまし上手くないんで近頃はご無沙汰でした。

けど、元から二次元の漫画のキャラを模写するのと違い、リアルな三次元の人をデフォルメ化してイラストにするのは初めてだったんでかなり苦労…。奮発して買い集めた公式ガイドブックや写真集さまさまで。がんばったところで、そんなに似ないんですけどね。でも「戦うライダー・剣崎一真」の顔と「俳優・椿孝之」の顔ってよく見るとまるっきり違うように感じたので、俳優としての表情がほとんどの写真集は思ったほど参考にできなかった……。難しいなあ。

木漏れ日の差す道を、四つの足音が踏みしめる。

始めは敷き詰められた砂利が目立っていた山道は、徐々に下の土をさらし、その匂いを濃くしていた。

風が頬をさらりと滑り、木の葉がさわさわと揺れる。

時折どこからか鳥のさえずりが聞こえ、そのたびにさくらの表情が綻んだ。

「湖ってどんなところかな？ すごくきれいなのかなー？」

左に桃矢、右に藤隆が歩く真ん中で、今朝作った弁当の入っているバスケットをしっかりと抱えながら矢継早に問いかける。

「そんなに大きな湖畔ではないって聞いているけど、景色は綺麗なところだって。夕暮れ時がおすすめだって言われました」

「……なら、今日はその時間までいるのか？」

「うん、できればそうしようと思っています。今の季節は日が長いから、そうするとけっこう遅くなっちゃいそうだけどね」

シオルダータイプのクーラーバッグをかけている藤隆と、リュックを背負い、手に地図を持って何度も確かめる桃矢。

頭の上で交わされた会話に、さくらはますます胸を躍らせた。

——今朝はピクニックの準備のために早起きをしたが、大して眠気は残ってはいない。むしろ、これから立ち寄る湖畔がどんな所かという期待感で目はすっかり覚めていた。だがそのお陰で、

「怪獣が二日連続で早起きしやがった……今日は霰でも降ってくるかな」

起きて食卓に座るなり、当然のようにそう呟いた桃矢の足を、テーブルの下で踏んづけるという手間をかけさせられたが。

しかし、今朝早くに起きられたのは、一晩中眠りが浅かったという理由もあった。そのため、あの夢の続きを見ることはなかった……

あるいは、見たくないという思いがあつたからこそ、眠りも浅くなつてしまったのかもしれない。

夢を見れば見るほど、剣崎のことが気になってしまう。

悪い人ではないと感じている一方で、彼の挙動を怪しむ自分がいる。それがもたらすわだかまりが、さくらの中に生じる波紋を大きくさせていく。

山道を歩き続けながら、さくらはふと首を傾けて、背後を横目で窺つた。

——さくらと藤隆、桃矢が三人並んで歩いている後ろを、剣崎が歩いてきている。つかず離れず、という微妙な距離を置きながらだ。時々、思い出したように周りをきよきよと見たりはしているようだ、前を歩くさくらたちの会話に自分から入ろうとする気配はない。まるで、自分は赤の他人だと主張するかのように。

つい昨日まであんなに打ち解けてくれていた剣崎だったが、どうやらバーベキューの席でさくらを怒鳴りつけるように拒否したことが、彼自身の中で尾を引いているらしい。あの後すぐに、切った親指に絆創膏を貼り付けて戻ってきたが、皿を取って肉や野菜を口にはしたものの、さくらたちの団欒の輪を避けるかのような遠慮がちな物腰に戻っていた。

今も、ひよろりとした体躯に肩身の狭い思いをさせながら、黙々と歩き続けている。

視線を前へと戻したさくらはしばらく口を噤んでいた。

しかし、意を決すると、きりつと表情を引き締めて一人立ち止まつた。

目の前に現れた、緩い坂道に何本もの丸太を横倒しにして埋め込んだ階段を上りかけていた桃矢と藤隆が、急に足を止めたさくらを振り返って、不思議そうな顔をする。

「……おい。どした、怪獣」

いつものからかい文句を口にしつつも、気遣うような声音で桃矢が呼びかけた。

しかし、さくらはそれを丸つきり無視して踵を返し、後方について来ていた剣崎の所へ小走りで駆け寄った。

「——剣崎さんっ!!」

「うわあっ!」

突然目の前で急ブレーキをかけたさくらは、剣崎は驚いて声を上げる。周囲の野鳥がその声でさらに驚いて、ばさばさと飛び去る音がした。

そのまま、無言でじっ…と目を合わせられ、大いに戸惑った。

「……え……えっと…何?」

睨むような強い視線を受け、おずおずと尋ねる剣崎に、さくらは抱えていたバスケットを、ずい、と突き出した。

「……………」

剣崎の表情に、さらなる困惑の色が滲む。しかし、そのまま立ち尽くしているわけにもいかず、とりあえずといった風情でそのバスケットを受け取った。

痩せ気味ながらも肩幅の広い体に、洒落たデザインのバスケットはなんとも不釣り合いだった。

「——剣崎さん、そのバスケット落とさないで下さいね! お弁当入ってますから」

「へ…? ああ…うん」

目をぱちくりさせながらも、さくらの言い付けに、剣崎は素直に頷いた。それを確認したさくらは、何故か笑顔になって「よし!」と深く頷き返す。

「それじゃ、行きましょ! 早くしないと、食べる前にお弁当傷んじゃう」

そう意気込んで、さくらは呆氣にとられている剣崎の背後をさっさと陣取ってしまうと、両手でその背中をぐいぐいと押して前進させた。

「ちょ…っ、あの、大丈夫だから、あんまり押さないでっ…!」

「はいっ、いっちにーいっちにー!」

無理矢理歩を進めさせられて覚束ない足取りだが、バスケットだけはしっかり手に持っている剣崎。

そんな剣崎のうろたえた声にも動じず、さくらは運動会の二人三脚のような掛け声を上げて剣崎を歩かせる。

二人はあつという間に桃矢と藤隆に追いつき、立ち止まったままの彼らの間をすり抜けて、階段をぐんぐん上っていった。

完全にさくらのペースに巻き込まれている剣崎の後ろ姿を見届けて、桃矢は「ったく、どっちも世話の焼ける…」と呆れたように呟いた。すると、藤隆がくすりと笑い声を漏らした。さくらと剣崎にはなく、そんな桃矢に対して。

桃矢は眉を左右非対称にひそめて、藤隆を見る。

「……なんだよ」

「ううん。やっぱり、桃矢君も気にしてたんですね。剣崎君のこと」「そんなのじゃないって」

にこにこ微笑みながら、何気に深い所をぐさりと指摘してきた父親に、ふいつ、とそっぽを向く。

「……ただ、一緒にいる以上は何かあっちゃ困ると思ったただだから」

「そうだね。さくらさんも、剣崎君のこと気にかけているみたいだし」

あつさりと本心を見透かしている藤隆。桃矢の眉間のしわの本数が一気に増えた。

「ぼくは嬉しいですよ。さくらさんも桃矢君も、とても優しい子になってくれて」

先に段を上りながら藤隆が言う。その後続く桃矢の耳が、わずかに赤くなる。

「でも、バイクの整備、無事に終わって良かったですね。なんだが大変みたいだったけど」

優しく話しかける藤隆の言葉に、桃矢は「…まあな」と答えながら、今朝のことを思い起こした。

- 桃矢 回想モード -

まだ冷涼な朝風が吹く最中、コテージの前で、ぶおん、というエンジン音が響き渡る。

ようやく新品のタイヤに付け替えられ、各所のパーツも磨き上げられ、すっかり綺麗に生まれ変わった一台のバイク。そのスタンドを立てたままシートに跨った剣崎はハンドルを握り、何度もエンジンを吹かした。

傍らに座り込んだ桃矢が、煙と陽炎を吐くバイクのあちこちに目を走らせて、動きの怪しい部分がないか確かめる。

やがて、桃矢が無言で立ち上がると同時に、剣崎はキーをひねってエンジンを切った。

「……どうかな」

「ああ、特に変な所はなかった。大丈夫だと思う。音もくぐもってないしな」

「そうか…良かった、午前中に終わって」

桃矢の答えに、剣崎はほっとしたように口元を緩め、シートから降りる。

同時に桃矢も、ふーっと深い溜息を吐き、凝りを解すように肩を軽く回した。

「とりあえず、作業終了だな…お疲れさん」

「ああ。どうもありがとうございます」

控えめな口調で、あまりにも率直に剣崎が礼を言うので、桃矢は思わず頬を掻いた。

「別に、俺は勝手に手伝っただけだ。改まって礼言うようなことじゃない」

極力照れを隠した口調で応じる。すると剣崎が、ふっ、と笑みをこぼした。

あさっての方へ視線を逸らしていた桃矢は、その笑みに顔の向きを

戻す。昨日、「妹思いだ」と言った時と同じ笑い方をしている剣崎に、口をへの字に歪めた。

「……今度はなんだよ」

仏頂面で尋ねると、剣崎は笑みを引つ込めて「あ、いや……」と淀んだ。

「ちよつと、思い出し笑いしただけだから。気に障つたなら、ごめん」

「思い出し笑い？」

「うん……今の君みたいな物言いをする奴がいたんだ。礼を言つても、無愛想で素直に答えてくれなくて」

「——無愛想で素直じゃなくて悪かつたな」

剣崎の述べた「似てる奴」の説明に、桃矢の声が半オクターブほど低くなる。途端に剣崎はびくりと表情を硬くして、

「……す、すいません……」

と慌てて謝つた。その恐縮したような反応に、桃矢は深く溜息を吐いて「……ま、いいけどな。別に」と付け加える。

その傍らで、足元に置いていた工具箱を片付け、油と煤で真っ黒になつた軍手を外す。長時間外気に触れられずにいた両掌は、蒸した暑気も手伝つてすっかり汗まみれになつていた。

剣崎はバイクに差し込んでいたキーを抜いて、軽く弄びながらズボンのポケットへと押し込む。

「——よし。中に戻つて、出かける準備するか。父さんと怪獣が弁当作つてるし……」

「あ、あのさ」

言いながら、首からかけたハンドタオルで汗を拭いていると、剣崎がどこか緊張した声で言葉を發した。

桃矢は「……あ？」と怪訝そうに視線を向ける。

「……その、これから行くピクニックなんだけど。君と、お父さんと、さくらちゃんだけで行ってきたらどうかな？」

気を利かせるように、笑顔を浮かべて剣崎は言つた。しかしその笑

顔は、顔面の筋肉を意識して作った誤魔化し笑いだと桃矢は一目で看破する。

「俺は、その間こっちで留守番してるよ。せつかくの家族水入らずなんだから、部外者まで一緒に行く必要なんて――」

「あんた、昨日父さんが言ったこと覚えてるか」

つらつらと理屈をこね始めた剣崎にいい加減苛立ちが頂点に達しかけて、桃矢はやや棘を含んだ口調でその台詞を遮った。「……え」と間抜けな声が剣崎の口から漏れる。

「父さんが話してただろ、『ここで一緒に過ごすなら、あんたも家族同然だ』って。何をそんなに気使ってるのか知らねえけど、泊めてもらう礼がしたいんだったら、つべこべ言わずに黙ってついて来いよ」

「……でも」

「来たくないんだったら無理強いはいしない。けど、あんたが留守番だって知ったら、うちの怪獣の威勢がなくなるのは目に見えてる。それこそ天変地異でも起きかねないだろ。迷惑かけたくないなら尚更、一緒に来といった方が賢明だと思う」

さくらのことを何気なく引き合いに出した時、剣崎の顔色が僅かに変わった。

――理由は分かっていた。昨夜の出来事を気にしているのだろう。ひよっとしたら、剣崎は「さくらに嫌われた」と思い込みすらしているのかもしれない。

無理もない憂慮ではあるが、普段のさくらの性格を知っている人間からすれば、杞憂以外のなんでもない。だがそれを自分が知らせたところで、剣崎が態度を変えてくれるとも思えなかった。

はぁー、とまた深い溜息。

「……とりあえず、出発するまでに顔ぐらい洗っとけよ」

がたり、と重い工具箱を持ち上げて言葉を投げかける。剣崎は考え込むように目を伏せたまま、浅く頷いた。
そして、

「——やっぱり、似てるよ」

口の端に、どこか自嘲気味な笑みを浮かべて呟いた。

「……さっき言ってた、素直じゃない奴にか？」

「ああ。……今、一瞬だけ、そいつに諭されてるような気分になった」

桃矢の問いに、剣崎が視線を遠くに投げて答えた。その目は静かに本人にしか見えない過去の思い出へと向けられている。しかしそれは束の間のこと、剣崎はすぐに目の前の桃矢へと向き直った。

「……分かったよ。君の言う通り、ピクニックには一緒に行く。世話かけてごめん」

そう言つて、剣崎もまた顔を拭きつつ「——先に戻ってる」と断つてから、桃矢の横をすり抜けてコテージの玄関へと歩いていった。

- 回想終了 -

見つめる先で、山肌と丸太の階段を上りきった剣崎の背中と、整備の終わったバイクを後にしたときに向けられた背中が重なる。

剣崎はさくらに袖を引っ張られ、道をさらに先へと進んでいった。桃矢の口から溜息がこぼれる。コテージに来てからというもの、すっかり回数が増えてしまったことを思うと嘆かわしいが、満更でもないというのも本音だった。

段を一つずつ踏みしめながら、ふと桃矢は隣の藤隆に尋ねる。

「——父さんはさ、なんとも思わなかったのか？」

「あいつと一緒に泊めてやること。得ても素性も知れねえし、怪しさ満点だし……。よく置いてやる気になったなって」

「うん……。否定はしないけど、それは桃矢君も同じだよね？」

よいしょ、とクローラーバッグをかけ直した上で、藤隆はそう問い返

した。桃矢が、ぐっ…と言葉を詰まらせたのは言うまでもない。

「それは……あの怪物がごねたからだよ。一度言い出したら聞かねえし」

「ええ。さくらさんがバイクのことを言ってくれなかったら、ぼくもそのままにしていました」

会話を交わしながら上った階段は急勾配だったが、藤隆も桃矢も息を乱してはいない。左へ大きくカーブした道を見やると、数メートル先で、やはり疲れた様子のないさくらが剣崎をさっさと引き連れている。

「運動神経が良いのは、とーやの家の血統かな？」と、高校時代の体育祭で雪兎に言われた記憶が、桃矢の脳裏で蘇った。

「——でも、さくらさんがあんなふうに気にかけるなんて、何か理由があるんだろうし。それに……確かに知らないことだらけですけど、彼は悪い人じゃないってぼくは思ったから」

離れた場所にいるさくらと剣崎に、藤隆の話し声が届くはずもない。しかし、さくらは剣崎の袖を掴んだまま立ち止まり、くるりと振り返ると手を大きく振って見せた。満面の笑顔をたたえて。

どうやら、藤隆と桃矢が追い付くのを待っていてらしい。

「桃矢君も、そう思いませんか？」

微笑みを浮かべ、ひらひらと手を振り返すと同時に、藤隆は囁くように言った。

桃矢はその質問に、思わず道の先へ目を向ける。ちぎれんばかりの勢いで手を振っているさくらの横、バスケットを大事そうに抱えた剣崎が、戸惑い一色に染まった表情でこちらの様子を窺っているのが分かった。

「……敵わないよ、父さんには」

ふっ、と口の端に苦笑を刻んで、桃矢は観念したように呟く。すると、藤隆は振っていた手を下ろし、

「ぼくは桃矢君のお父さんだからね」

臆することなく、そう答えた。

二人はゆっくりと歩き、ようやく先を行っていたさくらと剣崎の元にたどり着いた。

「はしゃぎすぎだ、怪獣。転んでも知らねえぞ」

目の前に立つや否や、辟易したように言つてのけた桃矢の膝頭目掛けて、さくらの蹴りが飛んでくる。

スニーカーの爪先が鈍い音と共に食い込み、桃矢はあえなく悶絶してしゃがみ込んだ。

「ッ、まだ、怪獣としか、言つてねえだろ……！」

「それだけで十分です！ あと、どうせわたしは転んだら、道に穴が開くとか言うつもりだったんでしょ！」

「そんなこと言わねえよ……この山の中なら、穴が開くどころか土砂崩れが起きるだろうしな」
ぴきっ。

そんな音を立てて、さくらのこめかみに青筋が浮かぶ。

「もう、お兄ちゃんなんて知らない！ 置いてってやるんだから！」

剣崎さん行きましょ！」

「ええ？ いや、ちよっ……」

痛みに悶えながらも減らず口を叩いた桃矢に容赦なく言い捨て、啞然としかけている剣崎の返事も待たず、さくらは横道をずんずんと歩いていった。

剣崎は掴まれた袖を引かれるままに、その後を付いて行く。

そこでふと、ダメージから若干回復した桃矢が顔を上げ、さくらたちの行った方向と、自分の正面とを見比べた。

「……おい怪獣」

「だから怪獣じゃないってば……！」

メガホン代わりに掌を口元へ添えて呼びかけた桃矢に、さくらはいきり立ちながらも勢いよく振り向く。

「——人を置き去りにするのは勝手だけだな。そっちは湖とは逆方

向だ」

「……………えっ」

桃矢の台詞に、たっぷり間を置いてから、さくらは声を漏らして立ち尽くした。引っ張られていた剣崎も、きょとんとしている。

桃矢は蹴飛ばされた膝をさすりつつ、片手にした地図へ視線を落とした。

「湖に行く道はこっち。その道は……通れなくはねえけど、土砂崩れ注意だと。本物のな」

正面へと伸びているもう一つの道を指差してから、にやり、と桃矢は笑った。

さくらの顔が途端に引きつり、来た道を慌てて戻る。剣崎の袖を離さず連行するのは忘れない。

「な、なんで最初に言ってくれないのー!?」

「お前が勝手に先に行くからだろうが」

文句を言ったさくらに、桃矢はすかさず返した。横にいる藤隆は、優しい眼差しでそのやりとりを眺めている。

「もう、本当にお兄ちゃんのいじわる——っきゃあ!」

必死に反論を続けながら歩いていた足元が突然ずりりと滑り、さくらは悲鳴を上げた。見ていた桃矢と藤隆が大きく息を呑む。

日陰で湿気を多く含み、しかも若干の角度がついた坂道の土に足をとられ、成す術もなく尻餅をつく——かに思われた。

「危ないっ!」

その時、後ろにいた剣崎が咄嗟に腕を伸ばし、バランスを崩したさくらの体を抱きこむようにして支えた。

想像していたよりも強い力で捕まえられ、さくらは何が起きたのか分からず言葉を失う。

驚いて見開いた目が見ている先では、ほっと胸を撫で下ろしている藤隆と桃矢の姿があった。

「……だ、大丈夫?」

耳元から、気遣わしげな声。

さくらはどうか「…はい…」とだけ答えると、辛うじて剣崎の腕にしがみついたまま、スライディングした足の位置を戻して、のろのろと立ち上がった。

「すみません、助かりました……」

後ろに立った剣崎へ向き直りながらさくらが頭を下げる。剣崎ははにかんだような笑顔を浮かべて、

「いや…間に合ってよかったよ。ホントに大丈夫？」
と言った。

「はい。ちょっと足ひねりそうになりましたけど……なんとか」

「さくらさん、大丈夫ですか？」

答えている脇で、藤隆に声をかけられ「平気だよー！」と軽く手を振ってみせる。

「そそっかしいからそういうことになるんだ。気を付けろよ！」

言わんこつちやない、と呆れた顔をする桃矢にさくらはぐうの音も出なかった。代わりに握り締めた手をふるふると震わせる。

「気にするなつて……こんな山道、一回くらいコケても普通だよ」

後ろから肩を軽く叩いて、剣崎がそう言葉をかけてきた。すると、途端に水を得た魚のように元気を出して「…ですよねっ！」と相槌を打つ。

「ここからは俺が先に歩くよ。危なそうな道だったら言うからさ」

「あ…ありがとうございます」

すつ、と前へ出て道を戻り始める剣崎の背中をさくらは見上げる。

そこには、先ほどまでの遠慮が姿を消しつつあった。

さくらはふと、今まで掴んだりしていた服の袖口ではなく、体の横にぶら下がった剣崎の掌へ自分の手を重ねた。

体温同士が直接触れ合う感覚に、びっくりとその掌があからさまに強張り、剣崎は驚いたようにさくらへ視線を投げかける。困惑と、不審と、躊躇が入り混じった視線を。

だがさくらは物怖じすることもなく、優しく微笑み返した。

「——これなら、転びそうになってもすぐに立て直せますよね」

そう告げると、剣崎は軽く目を泳がせる。どう答えたものか悩んでいるのだろう。

すると「早く来いよー」と桃矢の急かす声がした。その声を受けてか、剣崎は一瞬諦めにも似た表情を見せ、肩をすくめる。重なった手が、緩く握り返された。

「……あの、ごめんな。昨夜怒鳴ったりして」

同時に、小さく付け足すようにかけられる言葉。

「いいですよ。わたし、気にしてませんから」

首を横に振ってみせると、剣崎は安心したような、照れくさそうな笑顔を浮かべ、再び歩き出した。

どうしてその時、剣崎の手を握ろうと思ったのか、さくら自身にもよく分からない。

ただ、前の日に傷を診ようとしたのを、剣崎が激しく振り払ったことがずっと頭に引っかかっていた。

もし剣崎がそのことを気に病んでいるのだとしたら、もう一度、その手に触れてみれば「自分は気にしていない」ということが言葉よりもはつきり伝わるのではないか——そう思ったのだ。

人と触れ合えないということは、寂しいことだから。

？・触 TEMPERATURE （後書き）

超・久々の更新です。遅くなり申し訳ありませんでした。放置プレイによるネットの海への自然沈没が恐ろしかったのでとりあえずUP。

前回からの仲直りだけ済ませておきました。サブタイトルの英語「temperature」は「温度・体温」という意味。高校の英語の先生は「温もり」と素敵な意識をしておりました。その単語を使っていたのが「蚊はあなたの皮膚の湿度と温もりを感知して血を吸いに来るのだ」なんていう思いっきり台無しな文脈でなければなお良かったと思います。さくらちゃんが剣崎君の手を握ったのは、別にそんなに特別な理由はないというつもりで書いてます。単純に親しい友達や家族と手を繋ぐのと同じ程度で感覚で。作中設定だとさくらはせいぜい12〜13歳、剣崎はたぶん23歳ですからね。こうしてみるとけっこうな年の差……。それでも、直接触るというコミニケーションはやっぱり特殊な絆が下敷きにあると思う。本当に心を許した相手にしかできないわけだから。『ブレイド』劇中で掴みかかった剣崎を思いっきり殴り飛ばしたりする始さんは、そういう心理の裏返しだったのではないのでしょうか。

——今回の話はあっさりなせいかな、あとがきに書きたいことが思い浮かばないことをお許しください。

やや余談です。

感想投稿嬉しいです。これからもしゃんじゃん書き込んでくださいますし。

……ただ、現在私情により住所が変更になりました、その都合上しばらく自宅からはネットに繋がなくなります。なので、感想その他の返信がすごく遅れることが予想されます。なんとか携帯も使って、

がんばって返事をしたいとは思っていますが…。

この作品の次の更新も、時期を予定できていません。もうじき四月、新生活スタートのラッシュの荒波に揉まれるので……。

本当にすみません！でもがんばります！！

最後に。更新停滞中も当作品にアクセスとお気に入り登録をしていただいている全ての読者の方々に、感謝を申し上げます。

本当に、誠に、心から！ありがとうございます！！

色々つまづき戸惑いながらもここまで書き進められたこと、そしてこれからもがんばりたいと思えるのは、他ならぬ皆様の励ましと期待とご愛顧のお陰です。

来月から新しい年度になっても、当作品とこの不肖モノカキ・みけぺんを、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、また次の機会に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5938i/>

ほしにねがいを

2010年10月12日17時33分発行